

埼玉県戸田市遺跡調査会報告書 第1集

みなみ ちょう
南 町 遺 跡 I

1987

戸田市遺跡調査会

は じ め に

戸田市遺跡調査会会長 岡 田 弘

本市で最初に考古学的発掘が行われたのが昭和42年夏のこと、そしてそれ以来、弥生、古墳両期にわたるあたりを中心に、ここ県南低湿の地における先人達の営為の跡を可能なかぎり明らかにし、学問的にも行政的にも市民の皆様の認識を深めていただき、郷土への関心と愛着をもっていただく貴重な手掛りを殖したいとする関係者の悲願は、当該各発掘報告書をはじめ、県選定重要遺跡という形をとっての学問的位置づけ、博物館建設にともなう常設および特別展示等によるアピール、社会教育における関係諸講座の開設、そして小学校教育における副読本「戸田」をテキストとしての郷土学習等に、さまざまな形や方法をとって具現化されてきました。

今回の戸田市南町遺跡Ⅰの発掘もまたその延長線上にあるのでありまして、そもそも土地所有者の熊本靖様方に参上の折、応待して下さった御母堂様から、当地周辺の太古にさかのぼっての遺跡密集の可能性、それらにかかわるところなしとしない諸々の口碑伝承、等々の由緒を探るためにも、この種の発掘には市がもっと身を乗り出してほしい、というほどのお話をいただき、本当に有難いと思いました。

いま一つ特記したいのは、市からこうした事業のお知らせを流しますと、万難を排して応援に駆けつけて下さる市民有志の方々がいらっしゃるということです。

つまり少くともこれらの方々に関するかぎり、そこには或る定着的な「文化層」が形成されていると申して過言ではないのです。

繰返すようですが、文化に対する市民サイドからの志向が確認されることほど行政担当者にとって力強く感じられることはないのであり、そもそも自治体が行う発掘事業の第一義とは正しくこうしたところにこそ見出すべきだと申せましょう。

本事業の学問的意味づけ、専門にわたる事項等は本文記載のとおりであり、周辺地域の状況を総合して評価を下すにはなお発掘の回を重ねなければなりません、ともあれ当会発足後初めての事業として、まずは好調なすべり出しと相応の成果をあげることができ、喜びに耐えません。

ここに御指導を賜りました専門家各位および御協力を惜しまれなかった市民の皆様に対し、改めて深く感謝申しあげ、あいさつとします。

例 言

- 1 本書は、埼玉県戸田市南町9-1の賃貸マンション建設工事に伴って発掘調査された南町遺跡1の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査事業及び整理事業は、マンション建設の事業者である熊木 靖（戸田市本町3-5-7）から、戸田市遺跡調査会が委託をうけて実施したものである。
- 3 発掘調査は、昭和61年7月8日から8月2日にわたって行なった。また整理作業は、昭和61年9月4日から昭和62年1月30日まで行った。
- 4 発掘調査は別表に掲げた調査組織により実施した。
発掘担当者 塩野 博 （戸田市立郷土博物館館長）
伊藤 和彦 （戸田市史編さん室主査）
調査補助員 福田 聖 （早稲田大学学生）
- 5 出土品の整理及び図版の作成は、発掘担当者の指導により福田 聖が当たった。
- 6 調査写真及び遺物の写真は、塩野 博が撮影した。
- 7 本書の執筆は、福田 聖を中心に文末に記した者が分担した。なお、塩野 博が責任を負うものである。
- 8 本書を作製するにあたり、立石盛詞、西口正純氏には格別の御指導をいただいた。また下記の方々からも御教示、御協力を得た。記して謝意を表する。（敬称略）

石野 博 信、石塚 和 則、井上 巖、金井 由美子、
酒井 和 子、村田 健 二、山崎 えり子、稲垣 賢 一、
大竹 仁、遠山 薫 子

- 9 発掘及び整理参加者は、下記のとおりである。（順不同）

五十嵐 紀志子、広瀬 幸子、須藤 輝子、渡辺 とよ子、
上原 勇、関 徳太郎、今井 巖、岡崎 久子、
土岐 恵美子、鈴木 節子、山口 ふみ子、江口 とよ子、
大竹 仁、遠山 薫子、津村 智紀、矢代 清吾、
諸岡 五倫、榎本 ひろみ、高橋 正子、吉田 光枝、
平野 照子、立石 春江、岩野 靖、秋葉 茂夫、
立石 至通、和田 卓、萩原 哲夫、河合 トシ子、
和田 茂穂、田中 隆一、西袋 哲也

目 次

はじめに

戸田市遺跡調査会会長

岡 田 弘

例 言

凡 例

1	発掘調査に至るまでの経過	1
2	発掘調査の経過 一日誌抄	1
3	南町遺跡 I の立地と環境	3
4	南町遺跡 I の概観	5
5	南町遺跡 I の遺構と遺物	11
(1)	第 1 号方形周溝墓と出土遺物	11
(2)	第 2 号方形周溝墓と出土遺物	22
(3)	その他の遺構と出土遺物	26
(4)	グリッド出土の遺物	29
(5)	表採遺物	31
6	結 語	32
(1)	南町遺跡 I の遺構について	32
(2)	南町遺跡 I の土器について	34
(3)	南町遺跡 I の性格について	41
7	付 記	42

発掘調査の組織

会 長	戸田市教育委員会教育長	岡 田 弘
理 事 (会長代理)	戸田市教育委員会事務局次長	奥 墨 修 一
理 事	戸田市文化財保護委員会委員	金 子 弘
”	”	萩 原 勝 明
”	戸田市開発部都市計画課課長	渡 辺 英 隆
”	戸田市開発部市街地開発課課長	熊 谷 清 志
”	戸田市建設部建築課課長	杉 浦 剛 男
”	戸田市教育委員会社会教育課課長	岩 野 靖
監 事	戸田市社会教育委員会委員長	金 子 良 平
”	戸田市郷土博物館館長	塩 野 博
事務局長	戸田市教育委員会社会教育課課長	岩 野 靖
事務局員	” 社会教育係長	立 石 至 通
”	” 社会教育課主事	和 田 茂 穂

凡 例

- 本書に掲載した挿図の縮尺は、原則として遺構図 $\frac{1}{80}$ ・ $\frac{1}{40}$ 、遺物実測図 $\frac{1}{4}$ である。それ以外は、図に添えたスケールを参照されたい。
- 土器観察表における胎土の記号は、下記のとおりである。
A：石英及びその仲間、B：金雲母、C：斜長石、D：黒く光る石、E：赤色粒子、F：白色粒子、G：褐色粒子、H：その他
また、土器等の色の表示は、農林省農林水産技術会議事務所監修、小山正忠・竹原秀男編著『新版標準土色帖』によるものである。
- 土層図中の水糸レベルは、すべて標高3mである。

1 発掘調査に至るまでの経過

戸田市は、昭和60年の埼京線の開通により共同住宅等の開発行為が進んでいる。このような状況において、戸田市教育委員会では、開発担当所管課と各種の協議を実施して文化財保護と開発事業との調整を図っている。

昭和61年4月21日に戸田市本町の熊木靖氏から開発行為に伴う事前協議がなされた。そこで教育委員会では当該開発地が本村遺跡、南原遺跡の周辺に位置し、埋蔵文化財が所在する可能性が極めて強いものと判断し、申請者に試掘調査を実施する旨通知した。

昭和61年5月7日に試掘調査した結果、古墳時代前期の土器数片及び集落跡らしい遺構が見られた。そこで、当該開発地には埋蔵文化財が所在する旨申請者に通知し、ただちに、その取扱について、教育委員会と熊木靖氏で協議が行われた。

その結果、遺跡の保存のついては、既に開発許可がなされ計画を変更することが不可能であることから、事前に記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

教育委員会は、発掘調査に際し、戸田市遺跡調査会を調査機関に指定し、同調査会を加え調査についての具体的な協議に入り、協議の結果、調査は昭和61年7月8日から開始することになり、昭和61年7月7日付けで熊木靖氏と戸田市遺跡調査会会長とは事業委託契約を締結した。

発掘に先だって、熊木靖氏からは文化財保護法第57条第2項の規定により埋蔵文化財発掘の届出が調査会からは同法第57条第1項にもとづく埋蔵文化財調査届けが文化庁長官あて提出された。

文化庁からは、昭和61年7月29日付、委保第5の990号をもって発掘届けを受理した旨通知があった。

(立石 至通)

2 発掘調査の経過 一日誌抄

南町遺跡の発掘調査は、1986年7月8日から8月2日までの約1ヶ月の期間で行なわれた。例年ならば梅雨明けしている時期なのだが、今年は戻り梅雨のために雨の日が多く、非常に厳しい日程下での調査となってしまった。この厳しい日程・天候にも係らず、何とか順調に調査を終了し得たのは、地元作業員の協力によるところが大きい。

以下では、この調査について、4つの時期に分けてその経過を述べる事とする。

7月8日～10日 遺跡の調査は、重機による表土の除去作業から始まった。試掘時に遺構が確認されたのが黄褐色粘土の基層面であった為、その面まで機械力でいっきに掘り下げる予定だったのである。ところが作業中に、黄褐色粘土面より20cm程の上層である暗褐色土層中から板石塔婆片、かわら

け、陶器片等が出土した為、中世の文化層の存在を考慮しない訳にはいかなかった。一旦作業を中止し検討の結果、中世の文化層存在の可能性を重視し、機械力による掘り下げはこの暗褐色土層上面でとりやめることにする。

7月11日～17日 検討の結果に基づき、まず調査区全域の遺構確認作業を行う。その結果、中世の遺構は存在しない事が確認された。表土中の遺物はグリット毎に掲げ、黄褐色粘土面までの人力による掘り下げを急ぎ行う。



溝跡発掘風景

7月18、19日 表土除去作業の傍ら、遺構確認の為数本サブトレンチを入れる。調査区の北側に周溝墓と思われる溝状遺構が、南側に薬研掘りの溝がある事が確認された。

7月21日～8月2日 サブトレンチの結果に基づき、まず遺構確認作業を行い、黄褐色粘土面での本格的な調査を開始する。7月21日から7月31日まで1号周溝墓の調査の傍ら、溝状遺構・土壇・ピットの調査を併行して行う。一旦8月1日に遺構の写真を撮影し、すぐさま2号周溝墓の調査にとりかかった。

8月2日に全ての写真撮影を完了し、資材を撤収、全作業を終了する。

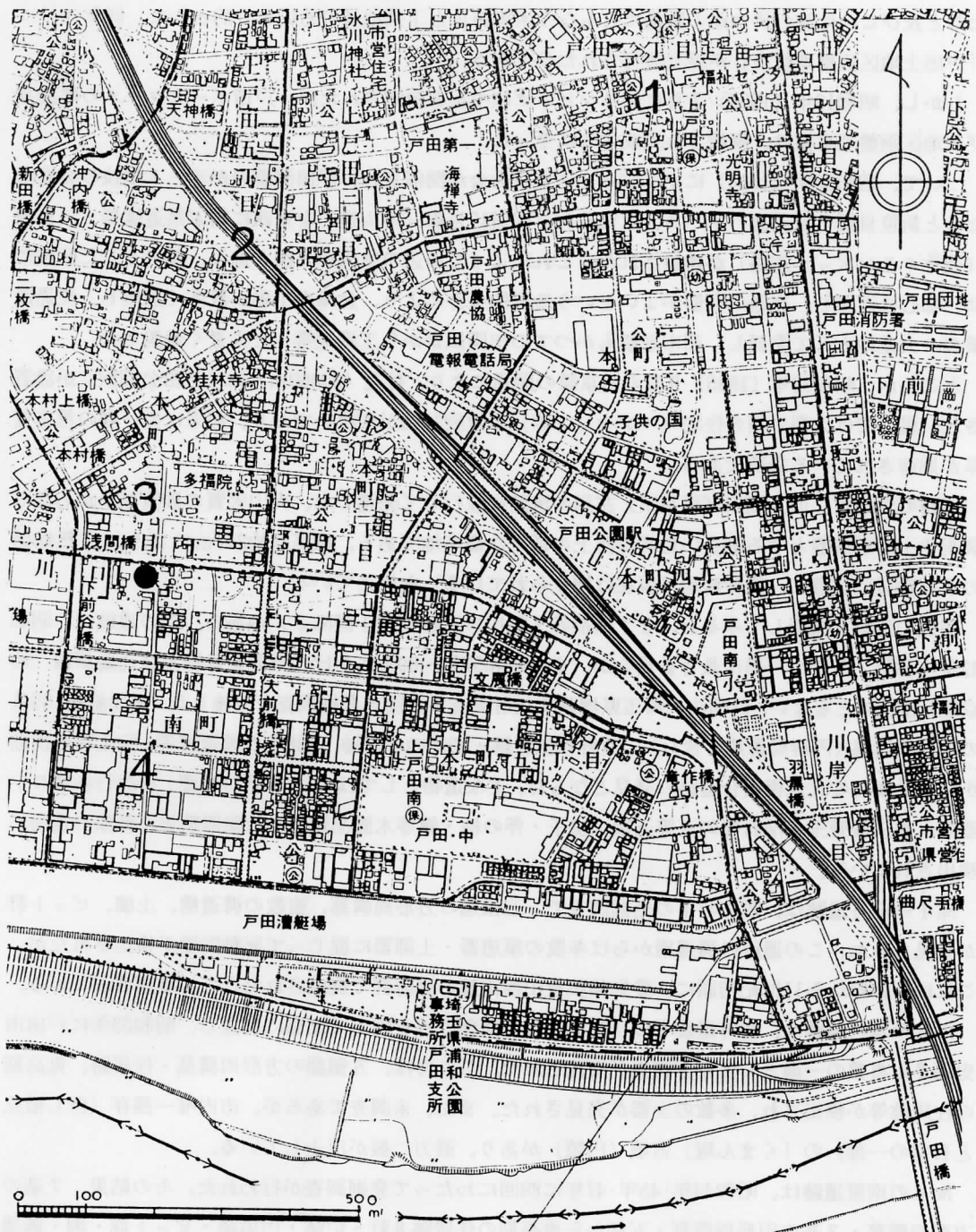
調査日数20日、参加延べ人員数202名であった。

(福田 聖)



第1号方形周溝墓発掘風景

3 南町遺跡 I の立地と環境



第1図 南町遺跡 I と周辺の遺跡位置図

(●南町遺跡 I)

南町遺跡Ⅰは、戸田市南町9番地に所在する。この地域は、市内でもいち早く区画整理事業が着手された場所である。これは、昭和11年（1936）第12回オリンピックが東京で開催されることが決定し、翌12年2月、大会競技場決定委員会が「ボートレースコースは戸田が第一候補に決定」したと発表したこと及びこの地域の排水路の整備にともなう水害防止と工業地域の造成を目的として、同年4月に「戸田土地区画整理組合」が設立許可されたのである。

しかし、昭和13年（1938）7月にオリンピックは中止と決定されたが、戸田ボートコースの建設及び土地区画整理事業は、継続され完成するに至った。

ついで、昭和39年（1964）にオリンピック東京大会が開催され、戸田漕艇場がボート競技の会場になると新笹目橋・新大宮バイパス、またそれと国道17号線（中山道）を東西に結ぶ県道練馬・川口線（通称オリンピック道路）が建設された。これによって周辺の整備が一段と進み、整然とした区域には、都心に近接し、交通の利便がよいという地理的条件により、倉庫や工場が数多く進出し、流通産業の一大基地として発展し、都市景観もかつての田園風景から工場地帯へと大きく変貌した。

ところが、昭和60年（1985）9月の埼京線の開通により、付近（約600m）に「戸田公園駅」が設置され、最近では大型の集合住宅（マンション等）の建設計画が相次いでおり、将来は高一層の都市変革が期待されている場所である。

遺跡の立地は、旧入間川（現荒川）左岸の流路に並行して発達した、火山灰質の砂質粘土からなる黄褐色土層を基盤とする細長い自然堤防上の低平な微高地である。標高は約2.7mであり、自然堤防の北端縁辺に位置し、後背湿地（現在は埋立られている）を控えている。

周辺の遺跡を概観してみると、まず鍛冶谷・新田口遺跡（第1図No.2）がある。この遺跡は、昭和42年・43年・57年に戸田市教育委員会が、また昭和57年～60年にかけて東北新幹線及び通勤新線（埼京線）建設にともない、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を実施した。その結果105基の方形周溝墓（円形周溝墓を含む）・37軒の住居跡・82基の井戸跡・236条の溝遺構等、弥生時代後期から近世までの大規模複合遺跡の発見となった。主な遺物としては、「S字状口縁甕」を含む多量の土器類、碧玉製管玉・滑石製勾玉等玉類、梯子・斧の柄・鍬等木製品類、中世陶器類等多種類の遺物が検出されている。

No.1の前谷遺跡は、昭和47年の発掘調査で、五領期の方形周溝墓、複数の溝遺構、土壙、ピット群が発見された。この遺跡の溝遺構からは多数の須恵器・土師器に混じって灰釉陶器が検出されたが、これは9世紀から11世紀初頭に、愛知県猿投山西南麓の窯跡群で焼成されたことが確認されている。

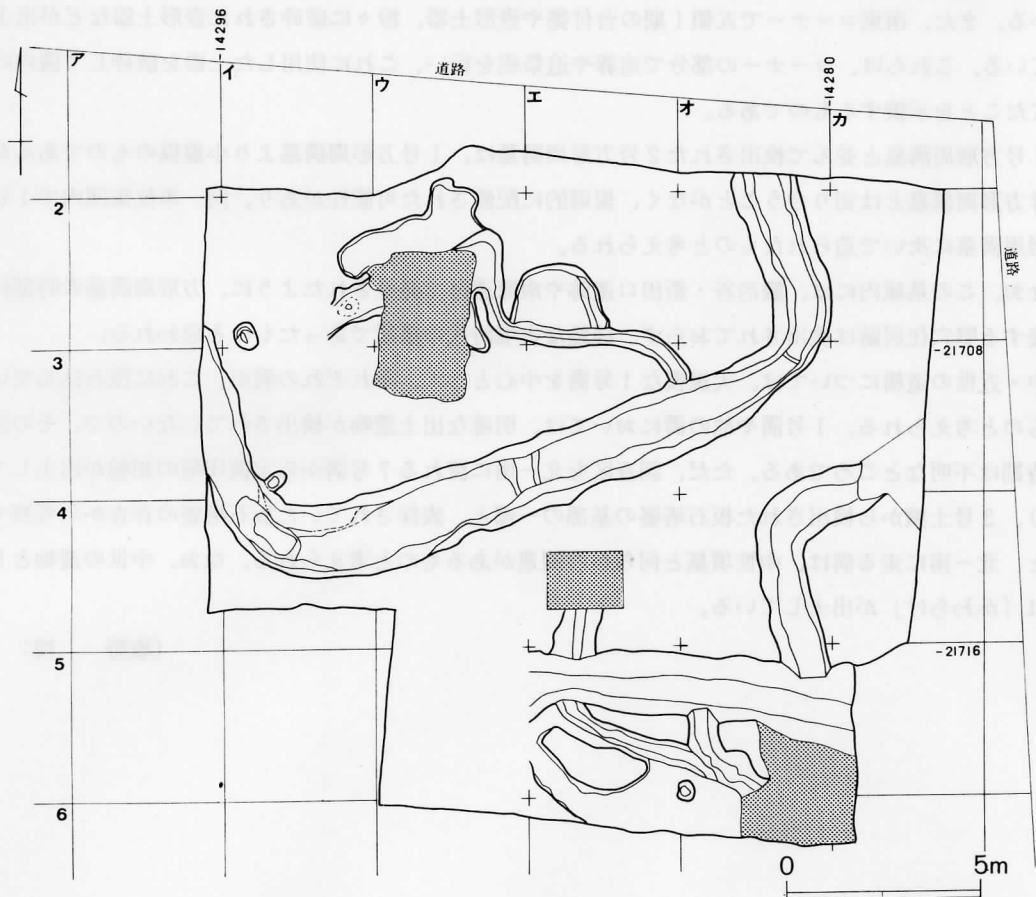
No.3の本村遺跡は、南町遺跡Ⅰの自然堤防の弯曲部の谷を隔てて北側に位置し、昭和53年に戸田市史編さん事業の一環として発掘調査が実施された。ここでは、五領期の方形周溝墓・住居跡、鬼高期の住居跡等が検出され、多数の土器が発見された。また、未調査であるが、市内唯一残存（但し墳丘と石室の一部）の「くまん塚」古墳（円墳）があり、直刀二振が出土している。

No.4の中原遺跡は、昭和44年・45年・47年に四回にわたって発掘調査が行われた。その結果、7基の方形周溝墓・3基の円形周溝墓・五領から鬼高期の住居跡8軒・炉跡・円墳跡・ピット群・堀・溝遺構等が検出され、多数の土器類が発見された。特に円墳跡の周堀内から円筒埴輪や人物埴輪が検出された。これらの埴輪類は、荒川左岸流域の古墳群では、最南端の発見である。（伊藤 和彦）

4 南町遺跡 I の概観

南町遺跡 I は、南に旧入間川（現・荒川）を臨む微高地、標高約2.7mにあり、遺跡北側の道路（オリンピック道路）を界して、本村遺跡につづいている。当該遺跡の発掘調査は、賃貸マンション建設用地約400㎡を対象に行ったものである。当初戸田市教育委員会社会教育課が試掘調査を行った段階では、集落跡（五領期の堅穴住居跡が検出される）ものと考えられていたが、本調査の進行にともない、その結果は予想し得ないものとなった。

さて、試掘調査の折、発掘現場の南側に居住する古老（もてこの現場に住んでいた）が、この地にあった板石塔婆の破片を調査団に提供された。この地に古くからあったと言うことであり、中世墳墓の存在も、この時予想するところとなった。すなわち、この南町遺跡 I は、試掘調査で検出された五領期の土師器破片から室町・江戸時代（古墳時代前期から中・近世）に至る長期の文化様相が観取



第2図 南町遺跡 I 遺構配置図

されたのである。

発掘調査は、まず重機によりかつて家屋の土台になっていた盛土を約25cm剥ぎとり、以下グリッドを組み丹念に表土を削平していった。この時点で、調査区の北側から集中して近世・中世の遺物及び板石塔婆が造立されていたと考えられるピット（3号土壙）が検出されている。

調査区域内からは、方形周溝墓2基、溝状遺構8条、土壙3基、ピット3基が検出された。これらの分布は、調査区中央より北側に、調査区のほぼ全体に1号方形周溝墓、これに並んで調査区の東側に2号方形周溝墓。そして、調査区南側に東－西方向に調査区を貫くように箱葉研掘りの1号溝がある。この1号溝に2・4・5号の3本溝が流れ込んで、複雑な水の流れを現出している。このほか、3・6・7・8号溝は、1号方形周溝墓を切って掘穿されている。

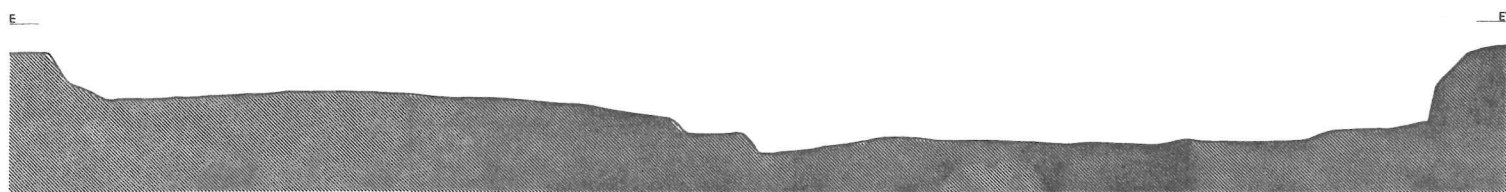
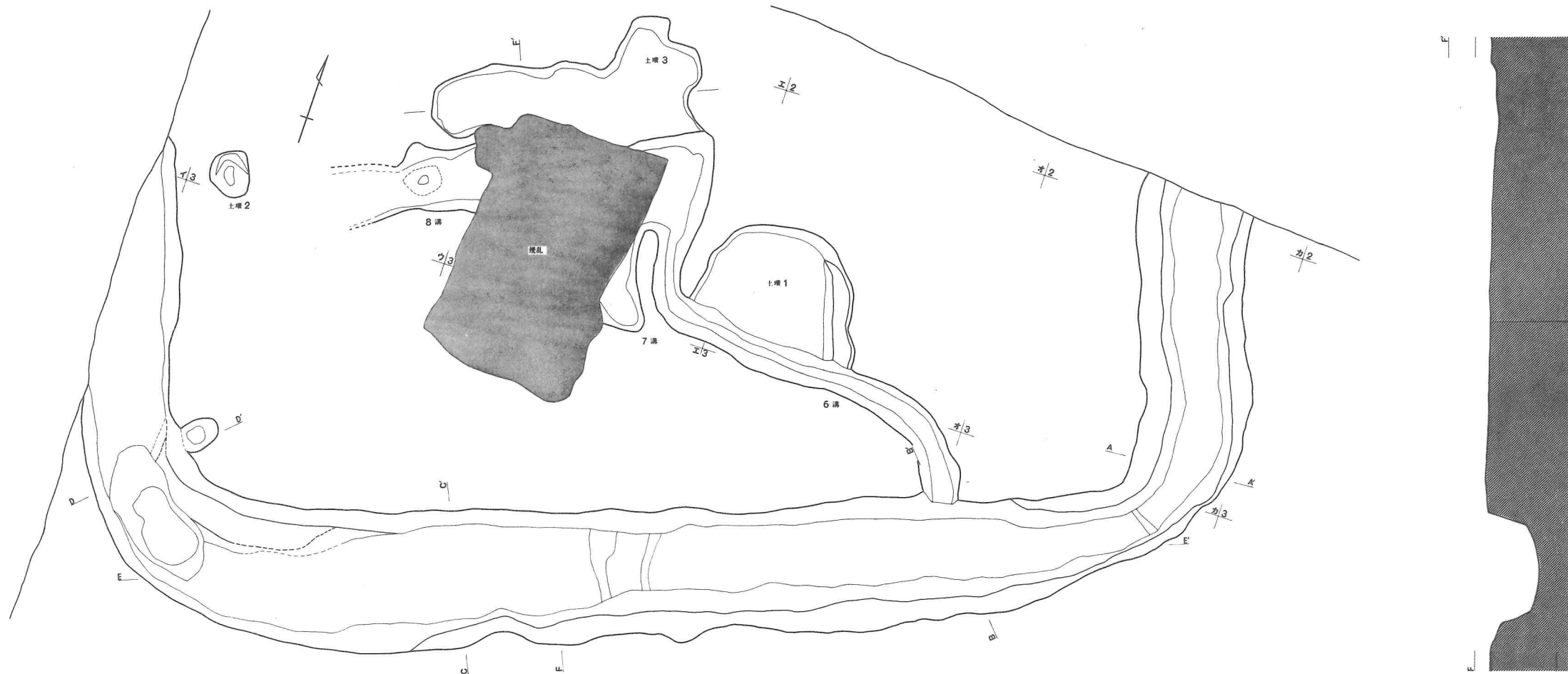
調査区中央の1号方形周溝墓は、南側方台部の一辺14mの大型のものである。遺憾ながら、北側が道路のため、全体が調査されていない。しかし、戸田市内では、鍛冶谷・新田口遺跡の大形の方形周溝墓に次ぐものである。この周溝墓は、埋葬施設と考えられる土壙をもっている。また、南西コーナーに張り出しをともなう堀り込み（溝中埋葬施設）があり、壺形土器が破砕された状態で検出されている。また、南東コーナーで五領Ⅰ期の台付甕や壺形土器、粉々に破砕された壺形土器などが出土している。これらは、コーナーの部分で追葬や追祭祀を行い、これに使用した土器を破砕して溝内に棄てたことを示唆するものである。

1号方形周溝墓と並んで検出された2号方形周溝墓は、1号方形周溝墓より小規模のものであるが、1号方形周溝墓とは切り合うことがなく、規則的に配置された可能性があり、同一単位集団内で1号方形周溝墓に次いで造られたものと考えられる。

なお、この墓域内には、鍛冶谷・新田口遺跡や南原遺跡で発見されたように、方形周溝墓の時期に近接する堅穴住居跡は検出されておらず、純然な古墳時代の墓域であったものと思われる。

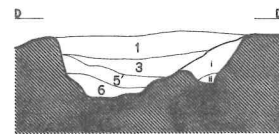
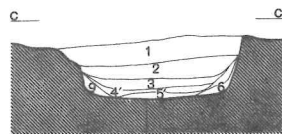
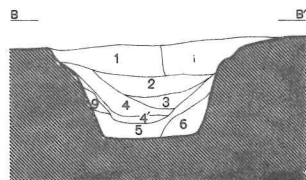
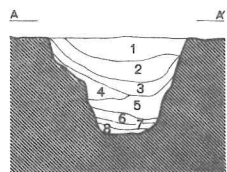
中・近世の遺構については、大規模な1号溝を中心として、それぞれの溝が、これに流れ込んでいたものと考えられる。1号溝や他の溝においては、明確な出土遺物が検出されていないので、その開溝時期は不明なところである。ただ、調査区を北－南に流れる7号溝から宝篋印塔の相輪が出土しており、3号土壙から検出された板石塔婆の基部の一部と、表採されていた板石塔婆の存在から考察すると、北－南に走る溝は、中世墳墓と何らかの関連があるものと考えられる。なお、中世の遺物としては「かわらけ」が出土している。

（塩野 博）



第1号 方形周溝墓土層註

- 第1層 黒褐色土層
- 第2層 暗褐色土層
- 第3層 暗褐色土層 (黄褐色粘土ブロックを含む)
- 第4層 黒灰色土層 (黄褐色粘土ブロックを含む)
- 第4'層 黒灰色土層 (第4層より明度が若干ある)
- 第5層 黒褐色土層 (黄褐色粘土ブロックを含む)
- 第5'層 黒褐色土層 (第5層にローム粒子を含む)
- 第6層 黒色土層 (灰白色粘土ブロックを含む)
- 第7層 黒色土層 (灰白色粘土ブロックを多く含む)
- 第8層 黒色土層 (黄白色粘土ブロックを含む)
- 第9層 黒灰色土層 (黄白色粘土ブロックを多く含む)



0 2m

第3図 第1号方形周溝墓実測図

5 南町遺跡 I の遺構と遺物

(1) 第 1 号方形周溝墓と出土遺物 (第 3～11 図)

調査区の北側、イ～オ・2～4 グリッドに位置する。北側周溝の全て、東西の周溝の一部は調査区域外にかかり、完掘し得たのは南側周溝のみであった。又、方台部では主体部を検出したが、既に削平されている為、遺存状態は良くない。

主体部は、イ～ウ・2 グリッドに位置している。前述した様に、残存状態は良いとは云えず、南側は攪乱され、東側は 3 号土壌に切られている。主軸方向は N-66°-E であり、本跡の南東に位置する 2 号周溝墓とはほぼ同一である。規模は、主軸方向で推定 3～3.5m 内外、短軸方向で 1m 内外を示すと思われる。深さは、5～10cm 程である。覆土は攪乱が著しく判然としないが、黄褐色粘土をブロック状に含む黒色土の様であった。底面の状態は、中央が僅かに窪んで北東方向へ緩やかに深くなっている。壺形土器 (第 9 図 10) が出土している。

周溝の形状は、方台部が直線的な辺を持つのに対して、コーナー部の溝幅が狭まる事により外辺は丸味を帯び、遺構全体としては所謂隅丸方形のプランを呈すると思われる。規模は、南側周溝部で方台部が 14m、溝幅はコーナーで狭まるものの概ね 1.4～2m を測り、大形である。周溝の深さは、南西→北東の方向で漸次深くなり、南西コーナーで 50cm、南溝中央部で 70cm、更に一段下がって 1m となっている。又、南西コーナー付近でテラス状の張り出しが確認できた為、溝中埋葬もしくは溝内の施設の存在を考え精査したが、溝底部に浅い掘り込みがあるのが判明したのみで、その他には何の痕跡も見い出せなかった。

覆土は、第 3 図の 1～9 層がこれに当たる。

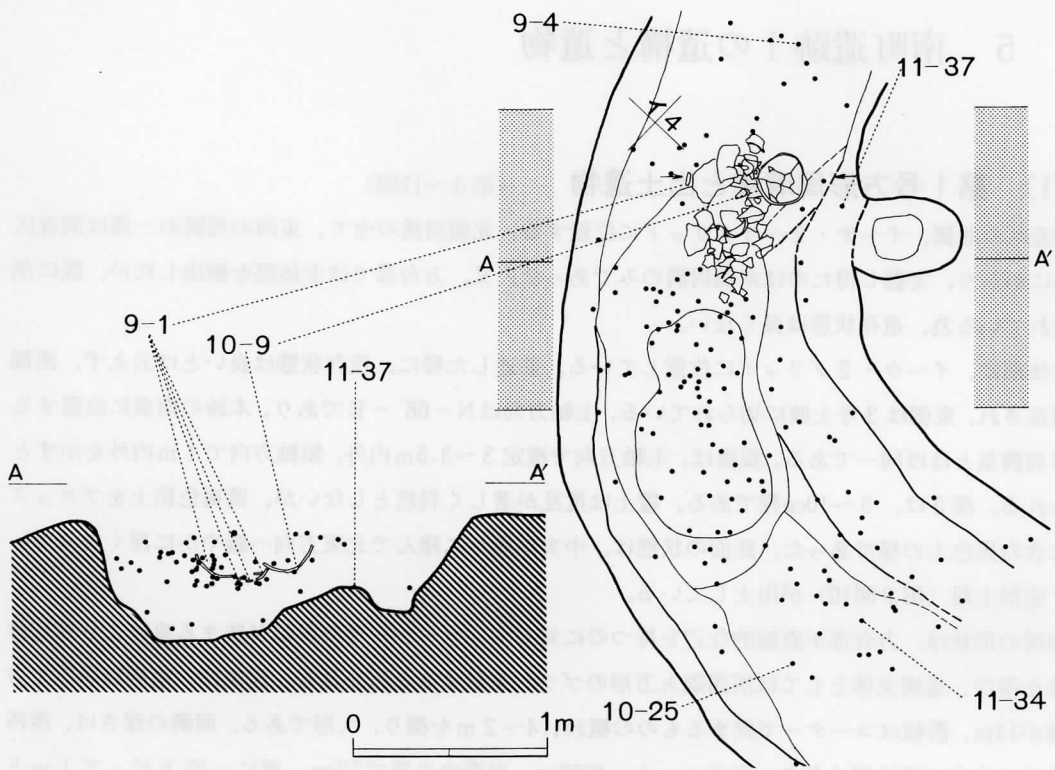
遺物は、第 4 図に示される様に、コーナー部及び周溝中央部の 4 つのブロックから集中して出土する傾向が見られる。以下、各ブロックを南西から A→D ブロックと仮称して、平面分布及び垂直分布から遺物の出土状態を概観する事にする。

A ブロックは、南西コーナー部に位置している。溝底及びコーナーの掘りこみの底面からの出土は殆ど見られず、溝底から 30cm 程浮いた位置に集中して分布する傾向を示す。層位的には第 3 層に当たるとされる。このブロックからは、大形の壺形土器 (第 9 図-1) が破碎された状態で出土している。その出土層位に見られる炭化物・焼土、前述したテラス状施設、掘り込みの存在から、何らかの祭祀の可能性を示すものと思われる。

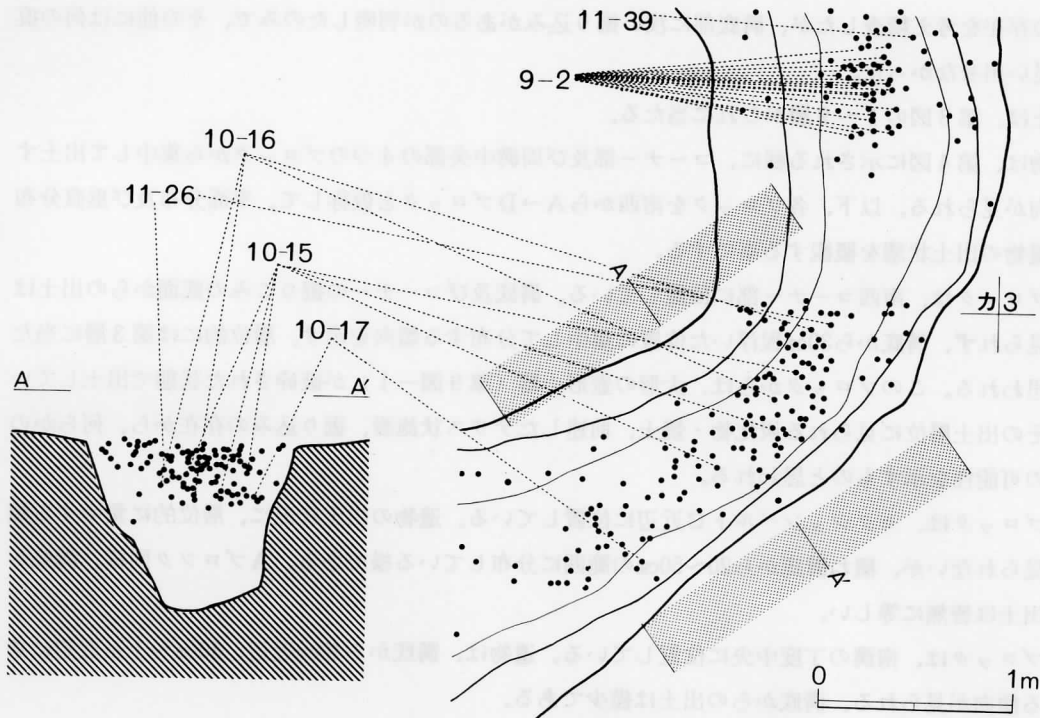
B ブロックは、セクションベルト C 近辺に位置している。遺物の出土状況に、層位的に集中する傾向は見られないが、概ね溝底から 20～50cm の範囲に分布している様である。A ブロック同様、溝底からの出土は皆無に等しい。

C ブロックは、南溝の丁度中央に位置している。遺物は、溝底から 40cm 近辺、80cm～1m 近辺に集中する傾向が見られる。溝底からの出土は僅少である。

D ブロックは、南東コーナーに位置する。遺物は、第 1 層・第 2 層から集中して検出され、その他



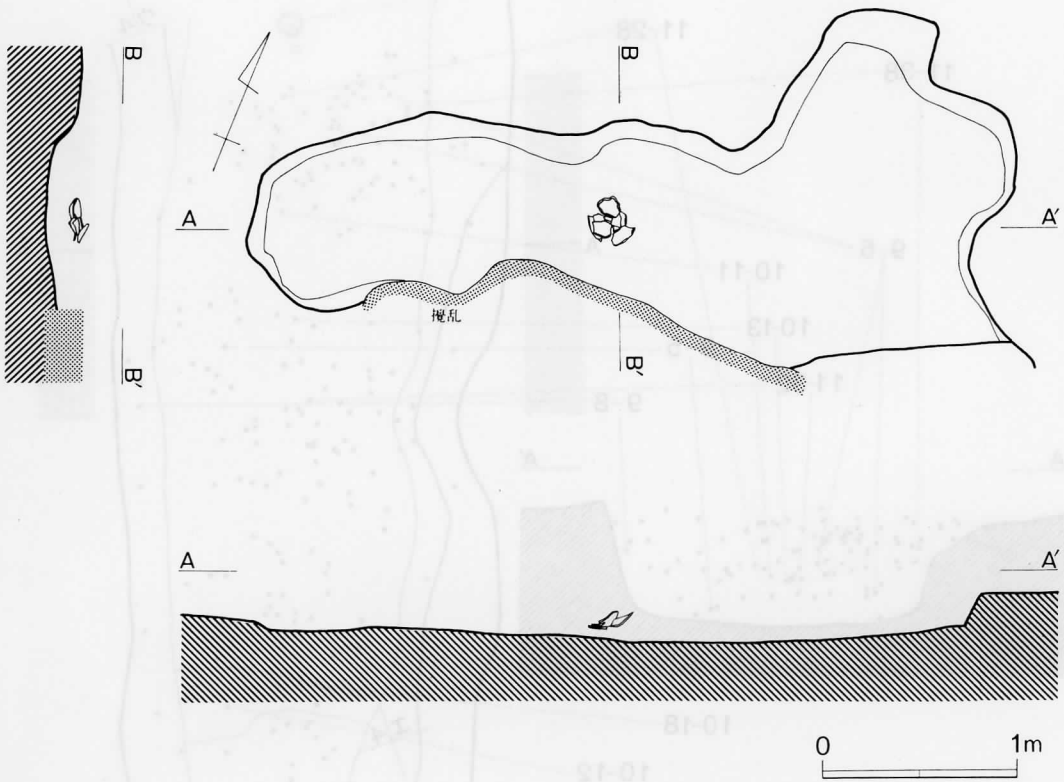
第5図 第1号方形周溝墓遺物出土状態 (2)



第6図 第1号方形周溝墓遺物出土状態 (3)



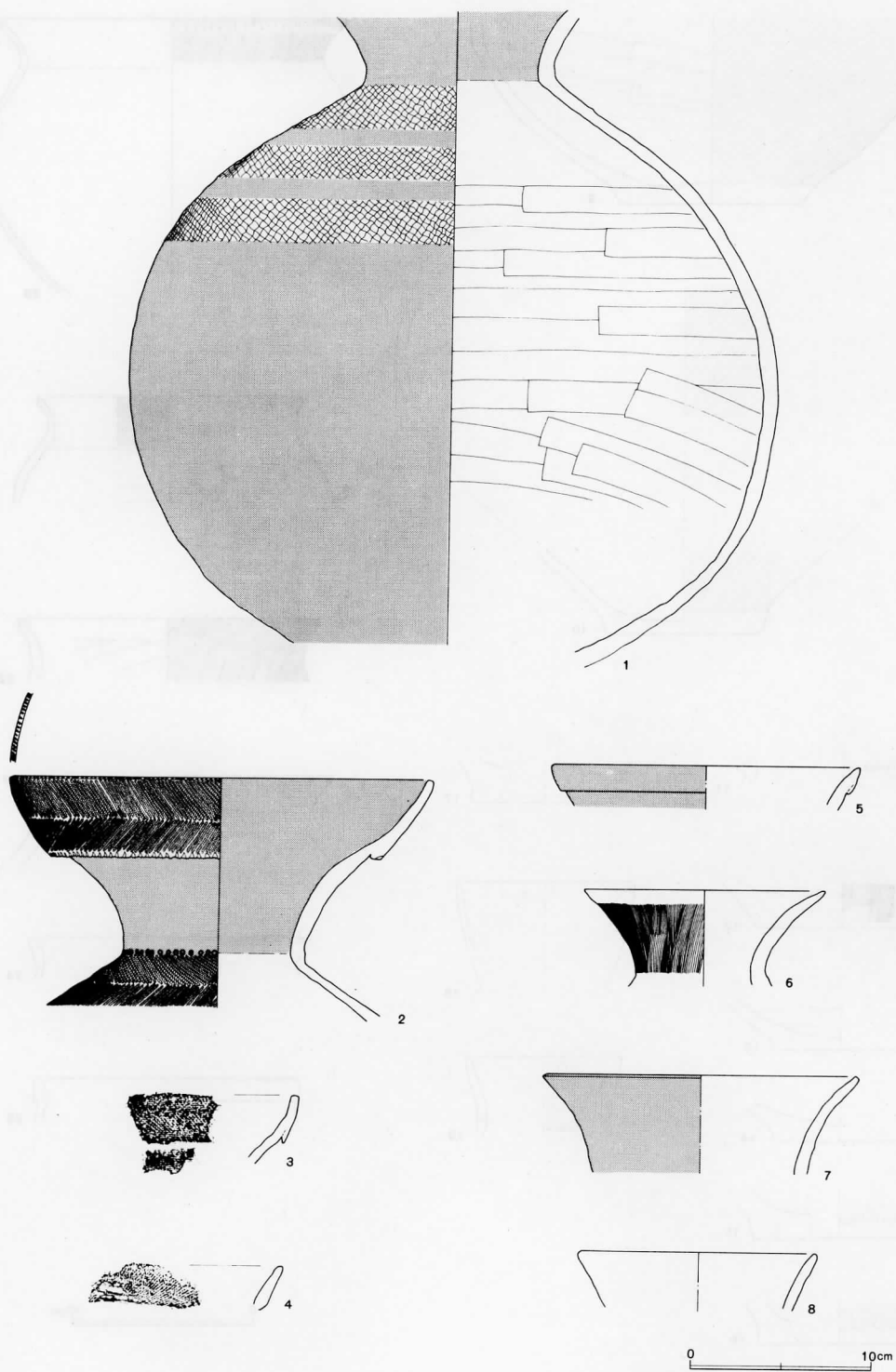
第7図 第1号方形周溝墓遺物出土状態 (4)



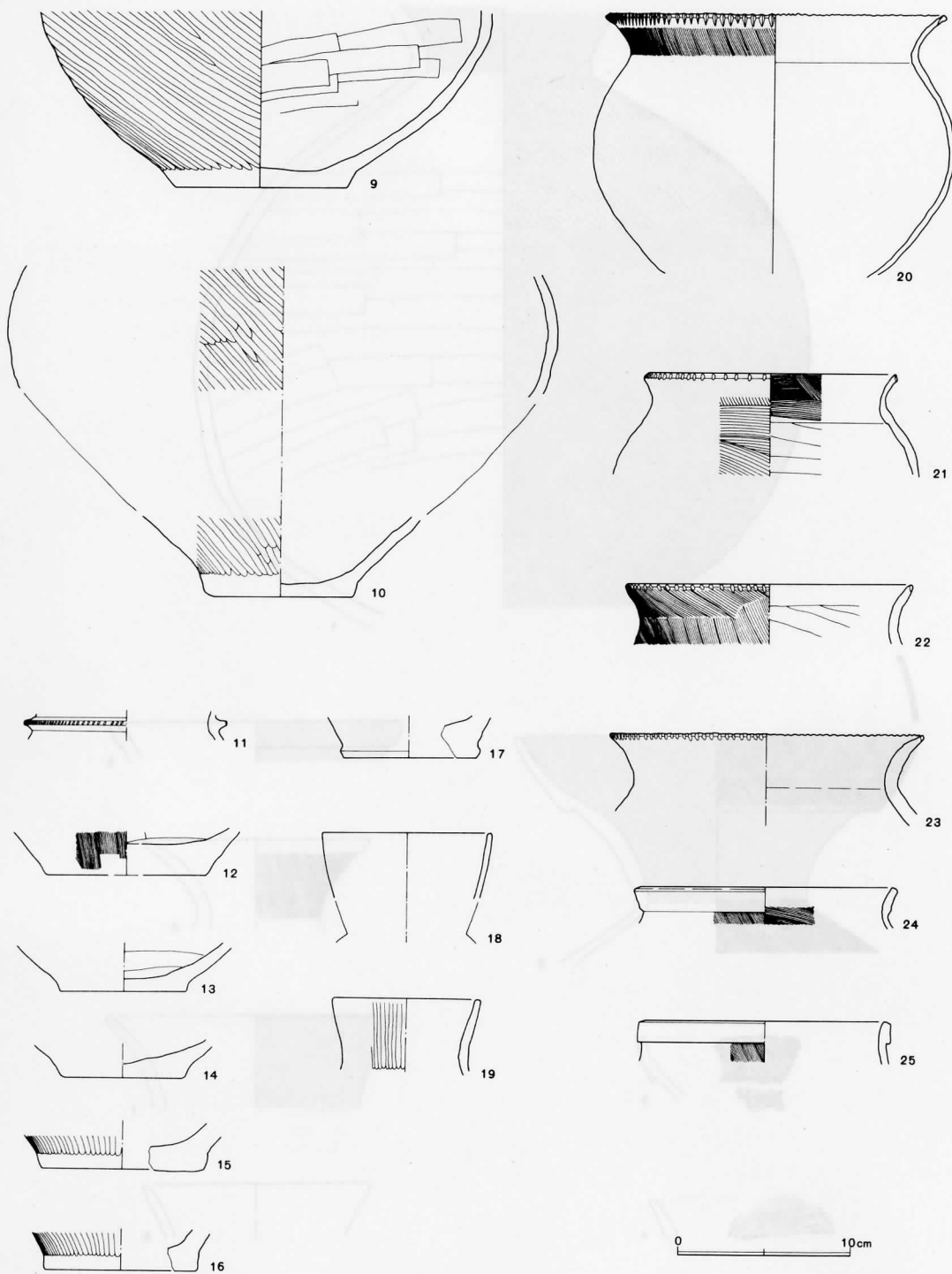
第8図 第1号方形周溝墓主体部実測図

の層位からの出土は極僅かである。口縁部・肩部に羽状縄文を施す壺形土器（第9図-2）も、第1層中から粉々に破碎された状態で出土しており、当ブロックに集中して分布する穿孔された壺形土器底部（第10図-15~17）と合わせて、このブロックの土器が一括して破棄された可能性を示す物として注意される。

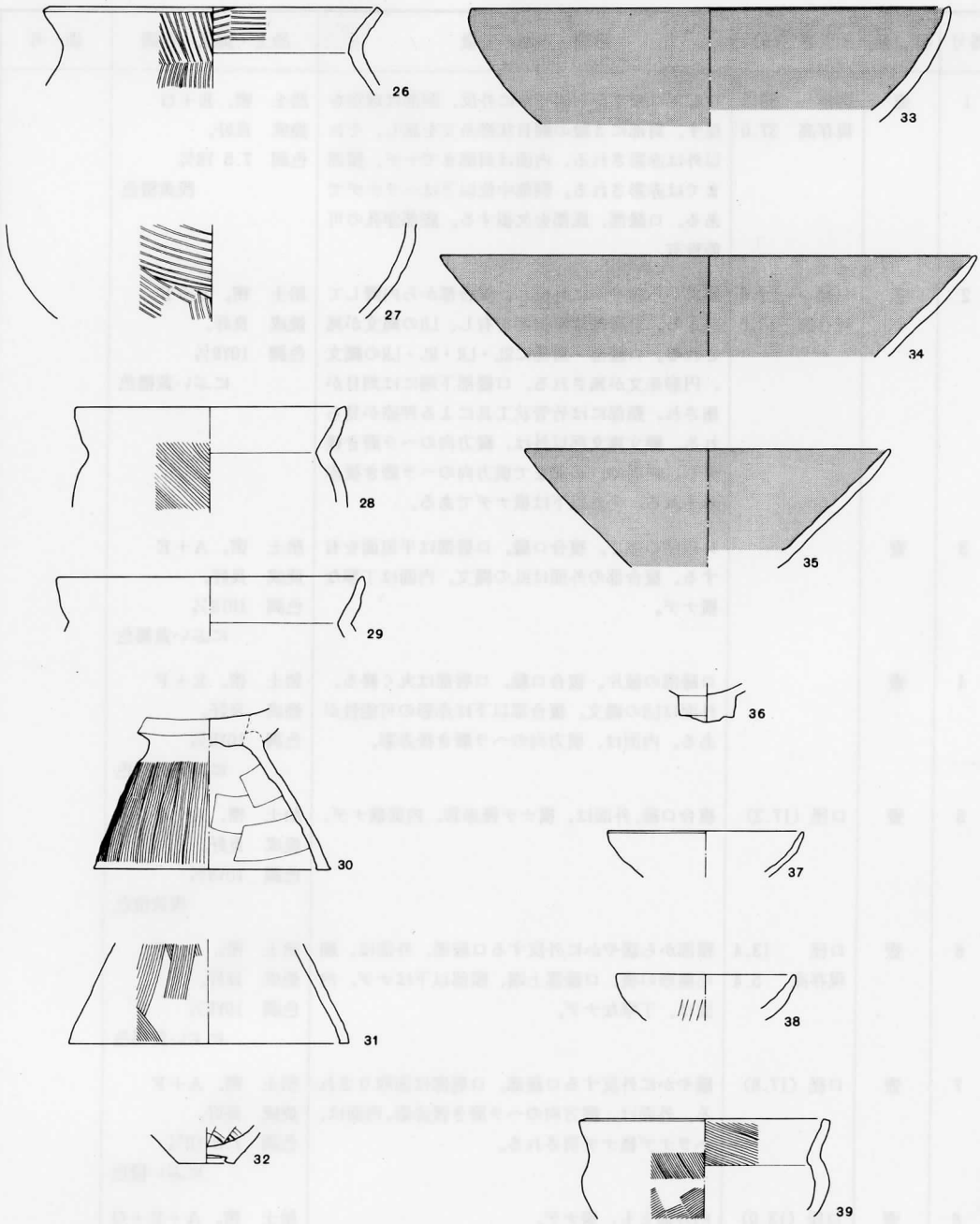
以上、4つのブロックの出土状況には、溝底に分布する遺物が僅少であるという事以外に全てに共通する傾向は見られない。しかし、A・Dブロックの出土状況は、コーナー部に於ける土器の廃棄を示すものと見られ、遺構と遺物の関係を考える上で見逃す事が出来ない。



第9图 第1号方形周沟墓出土遗物实测图(1)



第10图 第1号方形周沟墓出土遗物实测图(2)



第11図 第1号方形周溝墓出土遺物実測図(3)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺	胴径 36.3 現存高 37.0	口縁部は頸部から緩やかに外反、胴部は球形を呈す。肩部に3段の網目状捺糸文を施し、それ以外は赤彩される。内面は肩部までナデ、頸部までは赤彩される。胴部中位以下はヘラナデである。口縁部、底部を欠損する。底部穿孔の可能性有。	胎土 密。E + G 焼成 良好。 色調 7.5 YR $\frac{5}{2}$ 浅黄橙色	
2	壺	口径 23.8 現存高 13.0	頸部から緩やかに外反し、接合部から内彎して立上る。口唇部は平坦面を有し、LRの縄文が施される。口縁部・肩部にRL・LR・RL・LRの縄文、円形朱文が施される。口縁部下端には刻目が施され、頸部には竹管状工具による押捺が見られる。縄文施文部以外は、縦方向のヘラ磨き後赤彩。内面は、頸部まで横方向のヘラ磨き後赤彩される。それ以下は横ナデである。	胎土 密。E + F 焼成 良好。 色調 10YR $\frac{7}{2}$ にぶい黄橙色	
3	壺		口縁部の破片。複合口縁。口唇部は平坦面を有する。複合部の外面はRLの縄文。内面は丁寧な横ナデ。	胎土 密。A + E 焼成 良好。 色調 10YR $\frac{7}{4}$ にぶい黄褐色	
4	壺		口縁部の破片。複合口縁。口唇部は丸く終る。外面はLRの縄文。複合部以下は赤彩の可能性がある。内面は、横方向のヘラ磨き後赤彩。	胎土 密。E + F 焼成 良好。 色調 10YR $\frac{7}{4}$ にぶい黄褐色	
5	壺	口径 (17.2)	複合口縁。外面は、横ナデ後赤彩。内面横ナデ。	胎土 密。A + G 焼成 良好。 色調 10YR $\frac{7}{4}$ 浅黄橙色	
6	壺	口径 13.4 現存高 5.4	頸部から緩やかに外反する口縁部。外面は、刷毛整形の後、口縁部上端、頸部以下はナデ。内面は、丁寧なナデ。	胎土 密。F 焼成 良好。 色調 10YR $\frac{7}{4}$ にぶい黄褐色	
7	壺	口径 (17.8)	緩やかに外反する口縁部。口唇部は面取りされる。外面は、縦方向のヘラ磨き後赤彩。内面は、ヘラナデ後ナデ消される。	胎土 密。A + F 焼成 良好。 色調 7.5 YR $\frac{5}{4}$ にぶい橙色	
8	壺	口径 (13.0)	内外面とも、横ナデ。	胎土 密。A + E + G 焼成 良好。 色調 10YR $\frac{7}{4}$ にぶい黄橙色	
9	壺	胴部径 26.7 底径 10.0 現存高 10.5	平底の胴部下半。外面は、斜方向のヘラ磨き。内面はヘラナデ。	胎土 密。A + F 焼成 良好。 色調 10YR $\frac{7}{4}$ にぶい黄橙色	

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
10	壺	胴部径(32.4) 底径 8.4	平底の底部から一旦直立した後、胴部は直線的に開く。外面は、斜方向のヘラ磨き。内面は、剥落の為不明	胎土 密。A + E + H 焼成 良好。 色調 10YR $\frac{7}{4}$ 浅黄橙色	主体部から出土。
11	壺		突帯を有す頸部。突帯は、上下を横ナデして先端に平坦な面を作り出し、刻目が施される。その他の部位の調整法は不明である。	胎土 密。A + E + F 焼成 良好。 色調 7.5 YR $\frac{7}{4}$ にぶい橙色	
12	壺	底径 (9.3)	平底の底部。外面は、刷毛調整。内面は、ヘラナデ。	胎土 密。E + F 焼成 良好。 色調 7.5 YR $\frac{7}{4}$ にぶい橙色	
13	壺	底径 (7.4)	平底の底部。外面は剥落の為不明。内面は、ヘラナデ。	胎土 密。A + F 焼成 良好。 色調 10YR $\frac{5}{2}$ 灰黄褐色	
14	壺	底径 (7.0)	平底の底部。内外面とも剥落の為不明。	胎土 密。E + F 焼成 良好。 色調 10YR $\frac{5}{2}$ 浅黄橙色	
15	壺	底径 (9.6)	平底の底部。焼成後穿孔される。外面、縦方向のヘラ磨き。内面は不明。	胎土 密。A + E 焼成 良好。 色調 10YR $\frac{7}{4}$ にぶい黄橙色	
16	壺	底径 (8.8)	平底の底部。焼成後穿孔される。外面は、ヘラ磨き。内面は、剥落の為不明。	胎土 密。A + E 焼成 良好。 色調 10YR $\frac{7}{4}$ にぶい黄橙色	
17	壺	底径 (8.0)	平底の底部。焼成後穿孔される。底部下端をヘラで平滑にしている。内面は剥落の為不明。	胎土 密。A + E + F 焼成 良好。 色調 10YR $\frac{7}{4}$ 褐灰色	
18	小形壺	口径 (10.0)	緩やかに内彎して立上る口縁部。所謂瓢壺形を呈すると思われる。調整法は、内外面とも不明だが、ヘラ磨きと思われる。	胎土 密。A + F 焼成 良好。 色調 2.5 Y $\frac{5}{2}$ 灰白色	
19	小形壺	口径 (8.8)	緩やかに内彎して立上る口縁部。所謂瓢壺形を呈すると思われる。外面は縦方向のヘラ磨き。内面は、丁寧な横方向のヘラ磨き。	胎土 密。A + E 焼成 良好。 色調 10YR $\frac{7}{4}$ 浅黄橙色	

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
20	台付甕	口径 20.2 胴部径 21.3 現存高 15.5	口縁部は、くの字状に屈曲し、最大径を胴部上位に持つ。外面は、刷毛整形後口縁部上端をナデて刻目を施す。内面は横ナデ。頸部以下は、加熱による剝落の為、調整法は不明。器壁は薄い。	胎土 密。A + F 焼成 良好。 色調 10YR $\frac{7}{2}$ 灰黄褐色	
21	台付甕	口径 (14.6)	口縁部は、頸部から緩やかに外反する。外面は刷毛整形後、口縁部のみ横ナデして刻目を施す。内面は頸部以上刷毛目、それ以下はヘラナデ。	胎土 密。E 焼成 良好。 色調 10YR $\frac{7}{2}$ 灰黄褐色	
22	台付甕	口径 (16.8)	頸部から緩やかに外反する口縁部。外面は刷毛目。口唇部に刻目を施す。内面はヘラナデ。	胎土 密。A + E 焼成 良好。 色調 7.5YR $\frac{5}{1}$ 褐灰色	
23	台付甕	口径 (18.4)	頸部から角度を持って外反する口縁部。内外面とも横ナデ。口唇部に刻目を施す。煤付着。	胎土 密。A + F 焼成 良好。 色調 7.5YR $\frac{5}{2}$ 灰褐色	
24	台付甕	口径 (15.0)	頸部から短かく外反する口縁部。複合口縁。口唇部に平坦面を持つ。外面は、複合部横ナデ、それ以下は刷毛目。内面は、口縁部のみ横ナデそれ以下は刷毛目。赤彩の可能性有。	胎土 密。A 焼成 良好。 色調 7.5 YR $\frac{7}{4}$ にぶい橙色	
25	台付甕	口径 (13.8)	頸部から直立気味に立上ると思われる口縁部。複合口縁。口唇部に平坦面を有す。外面は、複合部横ナデ、それ以下は刷毛目。内面は、横ナデである。	胎土 密。E 焼成 良好。 色調 2.5 Y $\frac{7}{5}$ 淡黄色	
26	台付甕	口径 (18.4)	頸部から、くの字状に屈曲する口縁部。口唇部は面取りされる。外面は太い刷毛目、内面は頸部以上太い刷毛目、それ以下は横ナデである。	胎土 密。E + F 焼成 良好。 色調 7.5 YR $\frac{7}{4}$ 橙色	
27	台付甕	胴部径(22.8)	26と同一と思われる胴部下半。外面は太い刷毛目、内面は横ナデである。	胎土 密。E + F 焼成 良好。 色調 10YR $\frac{7}{4}$ にぶい黄橙色	
28	台付甕	口径 (15.0)	頸部から、くの字状に外反する口縁部。外面は口縁部以上横ナデ、以下は刷毛目。内面は、横ナデである。	胎土 密。A + F 焼成 良好。 色調 10YR $\frac{7}{2}$ にぶい黄橙色	
29	台付甕	口径 (17.0)	頸部から、くの字状に外反する口縁部。内外面とも横ナデ。	胎土 密。A + E 焼成 良好。 色調 10YR $\frac{7}{3}$ にぶい黄橙色	
30	台付甕	底径 13.2 現存高 9.0	脚台部。外面は刷毛目、内面はヘラナデ。甕部内部は丁寧なナデ。	胎土 密。A + F 焼成 良好。 色調 7.5 YR $\frac{7}{4}$ にぶい橙色	

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
3 1	台付甕	底径 15.6 現存高 5.6	大形の脚台部。外面は刷毛整形後ナデ消す。内面は丁寧な横ナデ。	胎土 密。A + E + F 焼成 良好。 色調 10YR $\frac{7}{3}$ 浅黄橙色	
3 2	甕	底径 3.1	所謂ドーナツ状の底部。外面ナデ、内面は小口状工具による整形。	胎土 密。A + F 焼成 良好。 色調 10YR1.7/1 黒色	
3 3	高 杯	口径 (26.7)	緩やかに内彎して立上る杯部。口唇部に内傾する平坦面を有す。内外面とも、縦方向の丁寧なヘラ磨き後赤彩。	胎土 密。A + E 焼成 良好。 色調 10YR $\frac{7}{3}$ 浅黄橙色	
3 4	高 杯	口径 (29.8)	直線的に開く大形の杯部。内外面とも、縦方向の丁寧なヘラ磨き後赤彩。	胎土 密。A + E + F 焼成 良好。 色調 10YR $\frac{7}{4}$ にぶい黄橙色	
3 5	高 杯	口径 (20.2)	直線的に開く杯部。外面は、縦方向の丁寧なヘラ磨き後赤彩。内面は、斜方向の丁寧なヘラ磨き後赤彩。	胎土 密。A + E + H 焼成 良好。 色調 2.5 Y $\frac{7}{3}$ 淡黄色	
3 6	高 杯		接合部。杯部内面はナデ。	胎土 密。A + F + G 焼成 良好。 色調 10YR $\frac{6}{2}$ 灰褐色	
3 7	小形 高杯	口径 (10.8)	内彎して立上る杯部。内外面とも剝落の為、調整法不明。	胎土 密。 F 焼成 良好。 色調 5 YR $\frac{7}{6}$ 橙色	
3 8	小形 高杯	口径 (10.0)	内彎して立上る杯部。外面は縦方向のヘラ磨き後、口唇部のみ横ナデ。内面は、横ナデ。	胎土 密。A + E + F 焼成 良好。 色調 10YR $\frac{7}{3}$ にぶい黄橙色	
3 9	鉢	口径 (14.0)	口縁部は、偏平な体部から、くの字状に外反する。外面は刷毛整形後、口縁部及び体部屈曲部をナデ消している。内面は、頸部以上刷毛目、それ以下はナデ。	胎土 密。 E 焼成 良好。 色調 7.5 YR $\frac{6}{4}$ にぶい橙色	

(2) 第2号方形周溝墓と出土遺物 (第12～15図)

調査区の東側、オ～カ・3～4グリッドに位置する。調査区域内で検出できたのは、北側周溝、西側周溝の一部のみであった。主軸方向は、北溝を基準にN-65°-Eを指し、本遺構の北西に位置する1号周溝墓とはほぼ同一であると思われる。主体部は検出されていない。

遺構の形状は、調査出来た北溝、西溝の一部から判断して、1号周溝墓同様隅丸方形を呈する様である。規模は、西溝で方台部が4m以上、溝幅1.3m内外を示し、一号周溝墓よりは小形と思われる。溝の深さは、北溝・西溝とも50cm程であった。又、コーナー部にピットが存在するが、周溝との新旧関係は不明である。

周溝の覆土は、第12図の1～4が相当する。第1層は後世の攪乱の可能性がある。

第1層 褐色土層 (黄褐色粘土ブロックを含む。)

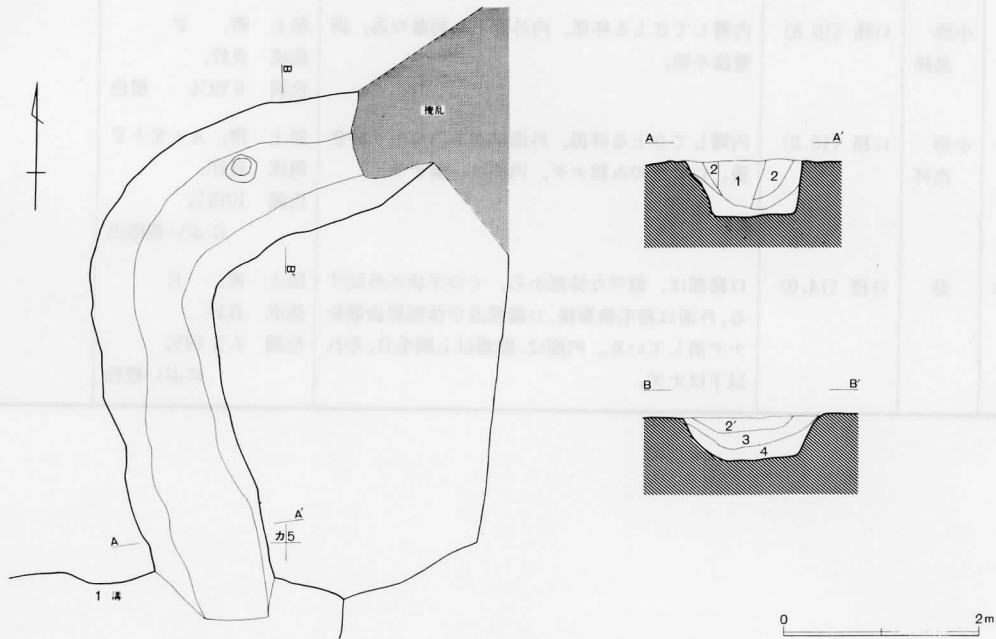
第2層 暗褐色土層

第2'層 暗褐色土層 (第2層に黄褐色粘土ブロックを含む。)

第3層 褐色土層 (ロームブロック、黄灰色粘土ブロックを含む。)

第4層 黒褐色土層 (ロームブロック、黄褐色粘土ブロックを含む。)

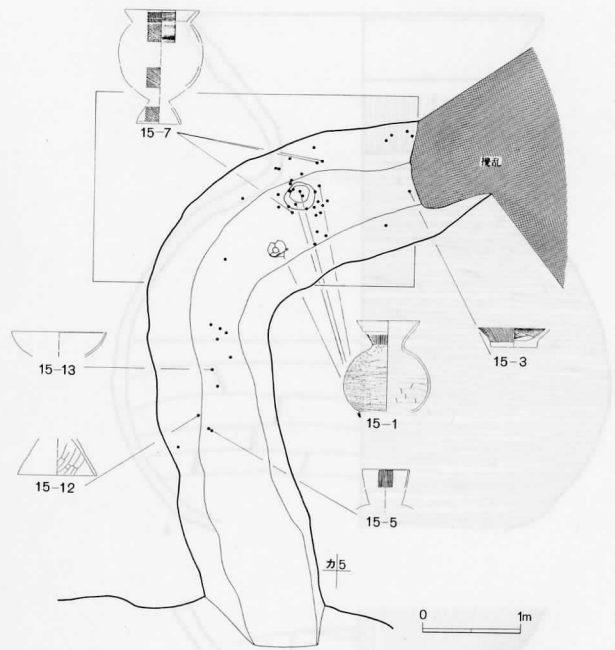
出土遺物は、時間的制約の為全てをドット処理する事はできなかったが、概ね第12図に示される様にコーナー付近に集中する傾向を持つ。1号周溝墓同様、溝底からの出土は僅少で、溝底から10～20cm程浮いた位置からの出土が大半である。層位的には、Bベルトの第3層に対応すると思われる。太目の刷毛目を持ち、赤彩された台付甕形土器(第15図-7)も、この位置からの出土である。



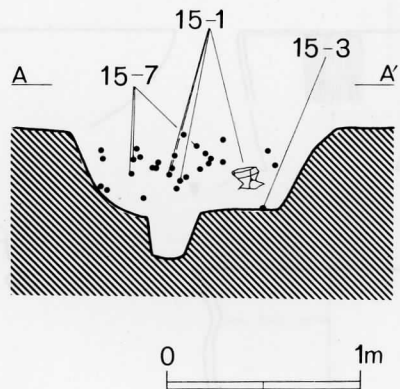
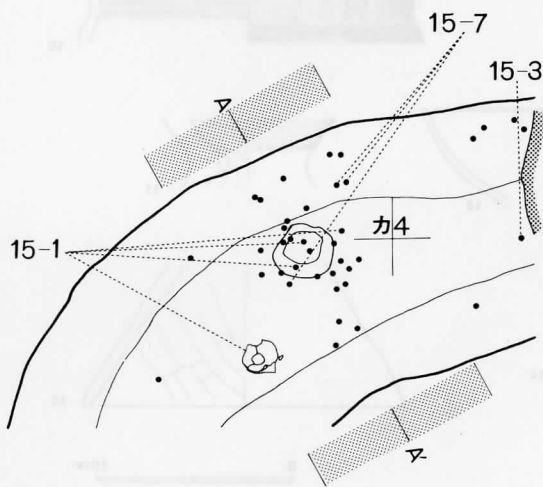
第12図 第2号方形周溝墓実測図



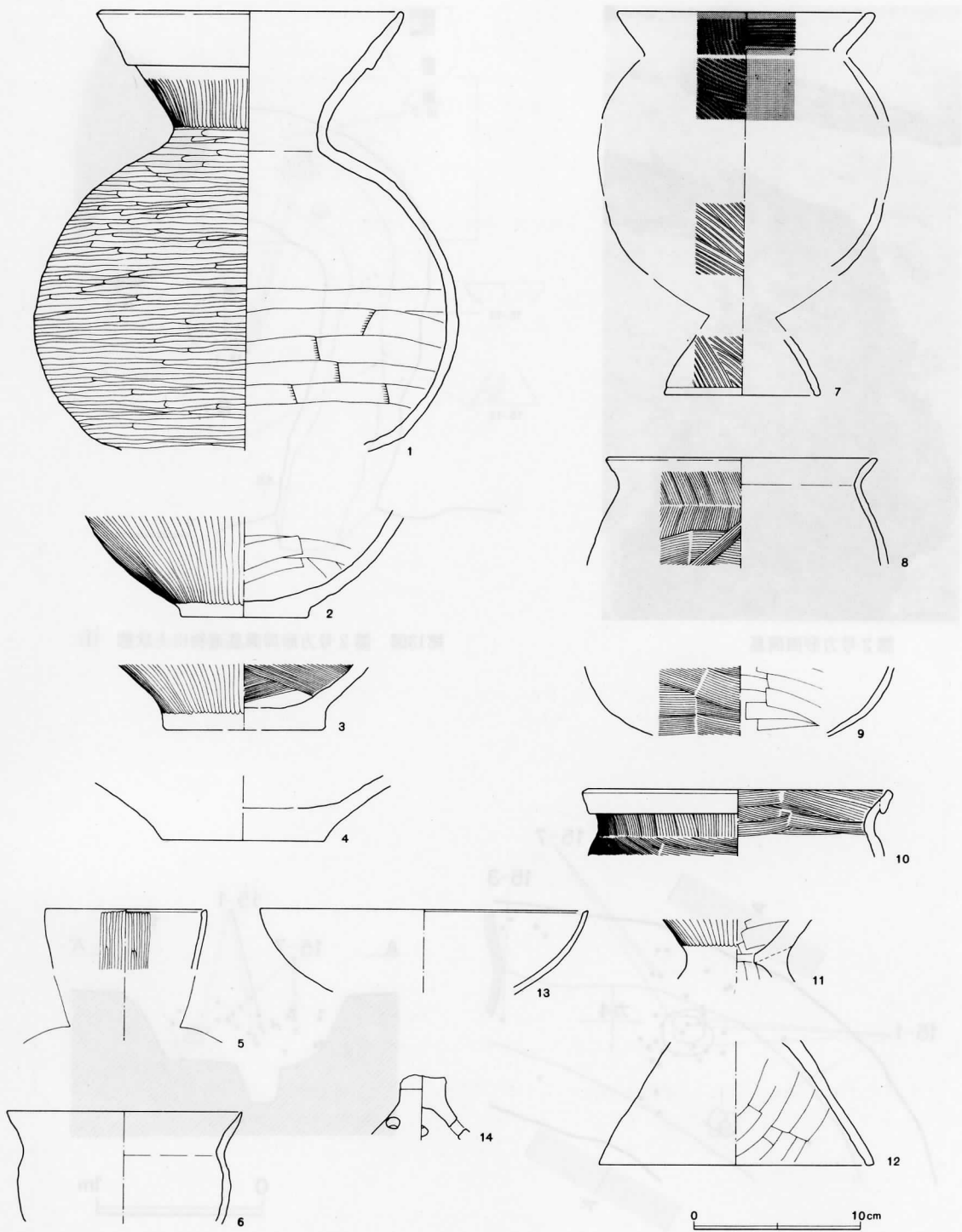
第2号方形周溝墓



第13図 第2号方形周溝墓遺物出土状態 (1)



第14図 第2号方形周溝墓遺物出土状態 (2)



第15图 第2号方形周溝墓出土遺物实测图

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺	口径 18.3 胴部径 26.0 現存高 27.3	口縁部は、頸部から緩やかに外反、胴部はやや扁平な球形を呈す。複合口縁である。外面は、複合部が横ナデ、口縁部が縦方向のヘラ磨き、胴部が横方向のヘラ磨きを施される。内面は、小口状工具による整形後、胴部中位以上はナデ消されている。	胎土 密。E+F 焼成 良好。 色調 10YR $\frac{7}{4}$ にぶい黄橙色	
2	壺	胴部径(19.4) 底径 7.6 現存高 6.7	平底の胴部下半。外面は、縦方向のヘラ磨き、内面は小口状工具による整形。外面は赤彩の可能性有。	胎土 密。E 焼成 良好。 色調 10YR $\frac{7}{4}$ にぶい黄橙色	
3	壺	胴部径(15.4) 底径 (10.0) 現存高 4.2	平底の胴部下半。外面は、縦方向のヘラ磨き。内面は小口状工具による整形。	胎土 密。E+F 焼成 良好。 色調 10YR $\frac{7}{4}$ にぶい黄橙色	
4	壺	底径 10.0	平底の底部。内外面とも調整法は不明瞭。外面ヘラ磨き、内面小口状工具による整形か？	胎土 密。E 焼成 良好。 色調 7.5 YR $\frac{7}{4}$ 橙色	
5	小形壺	口径 (9.8)	内彎して立上る口縁部。口縁端部に内傾する平坦面を持つ。所謂瓢壺形を呈すると思われる。内外面とも縦方向のヘラ磨き。	胎土 密。E 焼成 良好。 色調 10YR $\frac{7}{4}$ 浅黄橙色	
6	鉢	口径 (14.4)	口縁部は、頸部から、くの字状に開く。内外面とも、剝落が著しく調整法不明。	胎土 密。 焼成 不良。 色調 10YR $\frac{7}{4}$ にぶい黄橙色	
7	台付甕	口径 (15.8) 胴部径(17.0) 底径 (9.6)	赤彩され、球形胴を呈すると思われる台付甕。口唇部は面取りされ平坦面を持つ。外面は太目の刷毛目、内面は口縁部が刷毛目、それ以下は横ナデである。内外面とも肩部以上を赤彩する。	胎土 密。D+E+F 焼成 良好。 色調 10YR $\frac{7}{4}$ にぶい黄橙色	
8	台付甕	口径 (16.2)	口縁部は、頸部から、くの字状に外反する。口唇部は、外傾する弱い面を持つ。外面刷毛目、内面は剝落の為不明。煤が付着する。	胎土 密。F+H 焼成 不良。 色調 10YR $\frac{7}{4}$ 明黄褐色	
9	台付甕	胴部径(18.6)	8と同一の可能性を持つ胴下半部。外面刷毛目内面ヘラナデ。	胎土 密。F+H 焼成 不良。 色調 10YR $\frac{7}{4}$ 浅黄橙色	

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
10	台付甕	口径 (18.8)	頸部から緩やかに外反する口縁部。複合口縁。口唇部に平坦面を有す。外面は、複合部が指頭によるナデ、それ以下は刷毛目。内面は、頸部以上刷毛目、それ以下は横ナデである。	胎土 密。 E 焼成 良好。 色調 10YR $\frac{7}{4}$ にぶい黄橙色	
11	台付甕		接合部。甕部は、外面縦方向のヘラ磨き。内面は小口状工具による整形。脚台部は、外面剝落の為不明。内面ヘラ削り。	胎土 密。 A + E 焼成 良好。 色調 7.5 YR $\frac{7}{4}$ にぶい橙色	
12	台付甕	底径 (16.8)	大形の脚台部。外面は丁寧なナデ、内面は小口状工具による整形	胎土 密。 F 焼成 良好。 色調 10YR $\frac{7}{4}$ にぶい黄橙色	
13	高杯	口径 (20.0)	内彎して立上る杯部。口唇部に、内傾する弱い面を持つ。内外面とも剝落の為調整法不明。赤彩の可能性有。	胎土 密。 E + F 焼成 良好。 色調 7.5 YR $\frac{7}{4}$ 橙色	
14	高杯		脚部。内外面とも剝落の為、調整法不明。3孔を有す。	胎土 密。 A + E + H 焼成 良好。 色調 10YR $\frac{7}{4}$ 灰白色	

(3) その他の遺構と出土遺物

溝状遺構

本遺跡からは、8条の溝状遺構が検出されている。7号溝を除き遺物は僅少で、時期は明らかでない。ここでは、遺跡の南側に位置する1～5号溝、北側に位置する6～8号溝の2つに分けて述べる事にしたい。

1～5号溝 (第16図)

1～5号溝は、ウ～カ・5～6グリッドの調査区の南側に位置している。以下、各遺構について概説する。

1号溝は、第5列のグリッド杭沿いに東西に調査区を貫く形で、表土の第3層上面から掘りこまれている。溝幅は1.3～1.8 m、深さ90cm～1 mで、断面形態は薬研を呈す大形のものである。他遺構との切り合い関係は、2号周溝墓を切るのが確実な他は判然としない。第16図に見られる様に、覆土は4層に区分できる。遺物は土師器の小破片のみで、時期を決定できる資料は得ていない。

2号溝は、N-72°-Wの方向で、丁度1号溝に流れこむ形で掘りこまれる。1号溝、4号溝との切り合い関係は不明である。溝幅は50cm内外、深さは15～30cmを測る。覆土は、第I層褐色土、第II層明褐色土の2層に区分できる。遺物は出土していない。

3号溝は、南側調査区域外からN-46°-Wの方向に掘りこまれている。溝の南側は、2号溝の方向に大きく広がる様相を見せている。溝幅はエー6グリッド杭付近で80cm内外である。深さは、10~15cmで概して浅い。覆土は、第I層黒褐色土層、第II層黒褐色土層（黄褐色粘土ブロック多）の2層に区分できる。出土遺物は皆無である。

4号溝は、調査区南東隅から磁北方向へ曲がり、1号溝へ流れ込む形態を示す。溝幅は1号溝付近で80cm、深さは30~40cmを測る。南側で膨らむ形態を示すが、その意味は不明である。覆土は黒褐色を呈し、黄褐色粘土がブロック状に混在していた。遺物は出土していない。

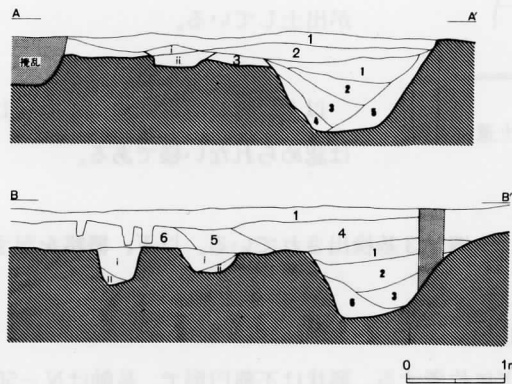
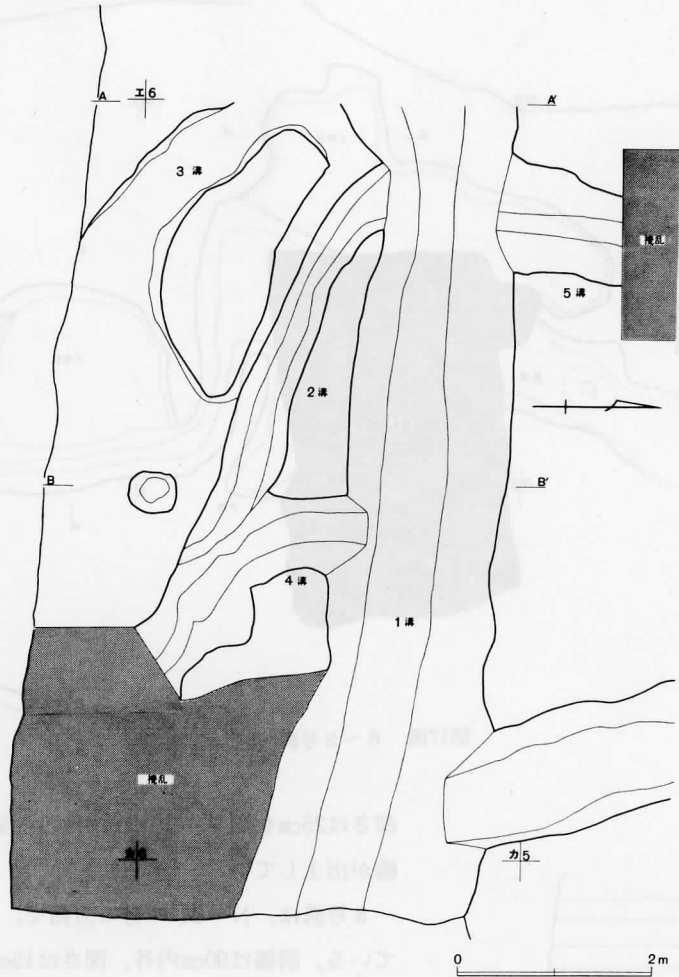
5号溝は、ほぼ磁北方向に伸び、攪乱中で終る様である。溝幅1m内外、深さ30cmを測り、覆土は明褐色であった。出土遺物は皆無である。

6~8号溝は、イ~エ・2~3グリッドに位置する。以下、各遺構について概説する。（第17図）

6号溝は、磁北方向から東西方向、南東方向へ曲がる形態を示す。溝幅は40~50cm、深さは30cmを測る。1号土壇、1号周

溝墓の主体部を切って、若干広がって終る様である。覆土は明褐色を呈し、遺物は出土していない。

7号溝は、N-45°-Wの方向で掘りこまれている。西側は攪乱され、不明である。溝幅は50cm、



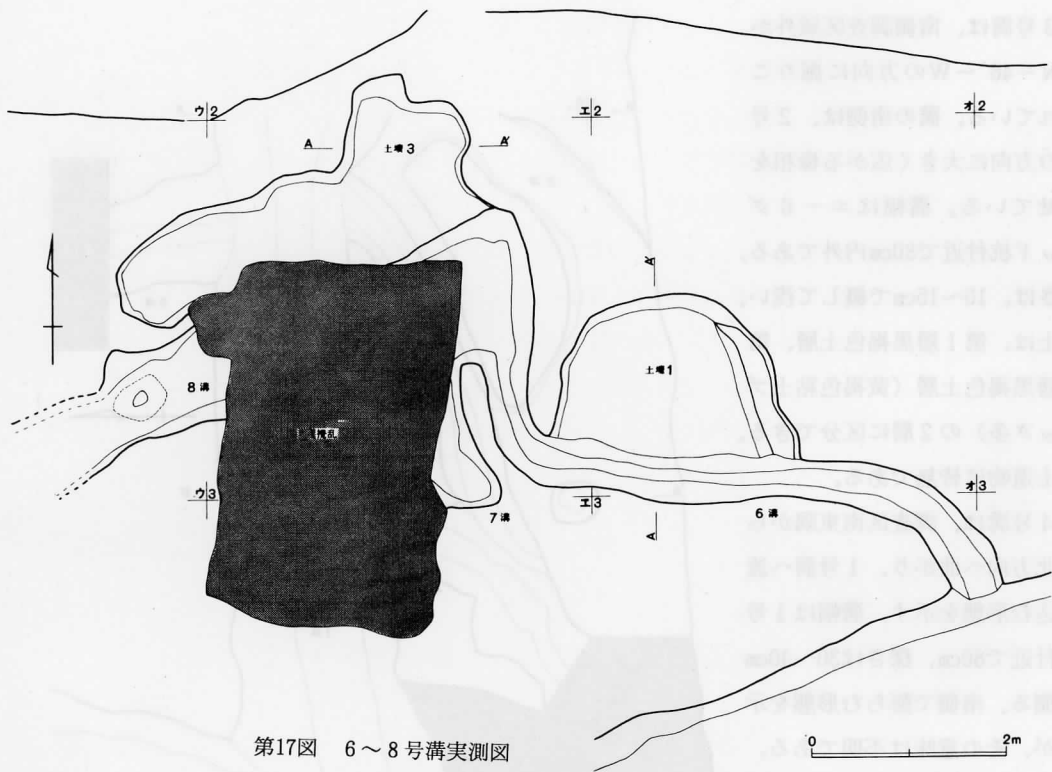
表土土層註

- 第1層 灰褐色土層
- 第2層 褐色土層
- 第3層 明褐色土層
(黄褐色粘土を含む)
- 第4層 明褐色土層
- 第5層 褐色土層
- 第6層 暗褐色土層
- 第7層 黒褐色土層

1号溝土層註

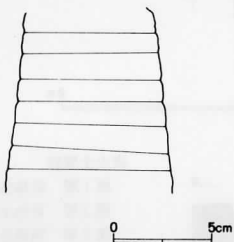
- 第1層 暗褐色土層
(黄褐色粘粒子を含む)
- 第2層 暗褐色土層
(黄褐色粘土ブロックをやや多く含む)
- 第3層 明褐色土層
(ローム粒子を含む)
- 第4層 明褐色土層
(黄褐色粘土ブロックを多く含む)

第16図 1~5号溝実測図



深さは25cmを測り、覆土は暗褐色を呈する。覆土中から宝篋印塔の相輪が出土している。(第18図)

8号溝は、 $N-64^{\circ}-E$ の方向で、2号ピットを切って掘りこまれている。溝幅は90cm内外、深さは15cm程で浅い。溝の東側は攪乱され、西側は緩やかに消失している。覆土は黒褐色を呈し、土師器の小破片が出土している。



第18図 7号溝出土遺物実測図

以上、溝状遺構について概観した訳だが、遺構間に規則性・関連性は認められない様である。

土 壌

本遺跡からは、土壌が3基検出されている。以下、概略を記す事にする。

1号土壌 (第19図)

エー2グリッドに位置する。形状は不整円形で、長軸は $N-50^{\circ}-W$ を示す。規模は、長軸方向で推定2.6 m、短軸方向で推定2.3 mを測る。深さは20cmと浅く、覆土は黒褐色を呈している。6号溝に切られる。遺物は出土していない。

2号土壇（第19図） イー2グリッドに位置する。形状は長軸方向がやや長い楕円形で、長軸はN-33°-Wを指している。規模は長軸が70cm、短軸が60cmを測り小形である。深さは50cm程度でやや深い。覆土は、第1層黒褐色、第2層黒色、第3層褐色の3層に区分できる。遺物は検出されていない。

3号土壇（第19図） ウー2グリッドに位置する。形状は、いびつな方形になると思われる。規模は東西で1.30m、南北で80cm程である。深さは10cmと浅く、覆土は明褐色で、1号周溝墓の主体部を切っている。又、本跡からは、板石塔婆片と思われる緑泥片岩の板状遺物が3点出土している。接合関係はなく、表面は剝落しており、線刻・種子・文字等は確認できなかった。

ピット

本遺跡からは、ピットが3基検出されている。いずれも、古墳時代の土器を包含するものである。以下、各ピットについて概略を述べる事にする。

1号ピット（第16図）

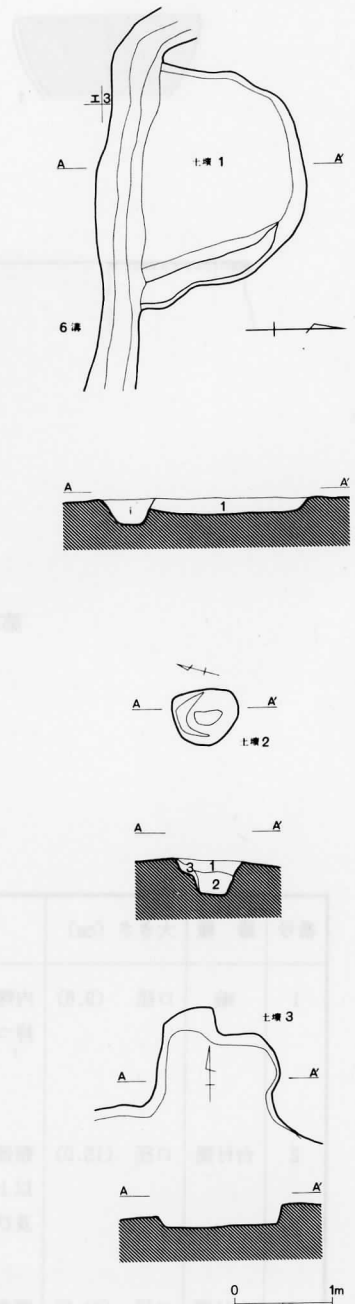
オー6グリッドに位置する。形状は、ややいびつな円形である。規模は48cm×44cmを測り、深さは40cm程である。覆土は、黒褐色土（第1層）、黒色土（第2層）の2層に分けられる。土師器の小片が出土している。

2号ピット（第19図）

イー2グリッドに位置し、8号溝に切られる。規模は55cm×40cmで、深さは10cm程である。覆土は黒色を呈し、土師器片を出土している。（第20図-1、2）

3号ピット（第3図）

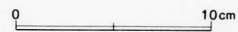
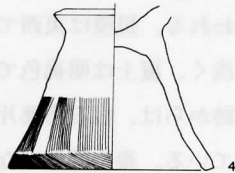
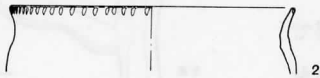
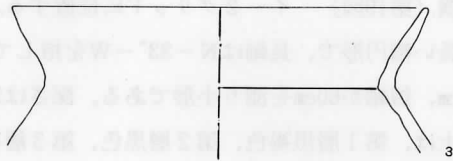
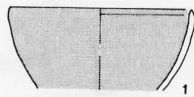
イー3グリッドに位置し、1号周溝墓に切られる。規模は56cm×46cmで、深さは48cmを測る。覆土は、黒褐色土（第1層）、黒色土（第2層）の2層に分けられる。覆土中から土師器片が出土している。



第19図 1～3号土壇実測図

(4) グリッド出土の遺物

本遺跡では、基層の黄褐色粘土の直上からも、僅かながら遺物が検出されている。以下に、図示可能なものを掲載しておく。（第20図-3、4）



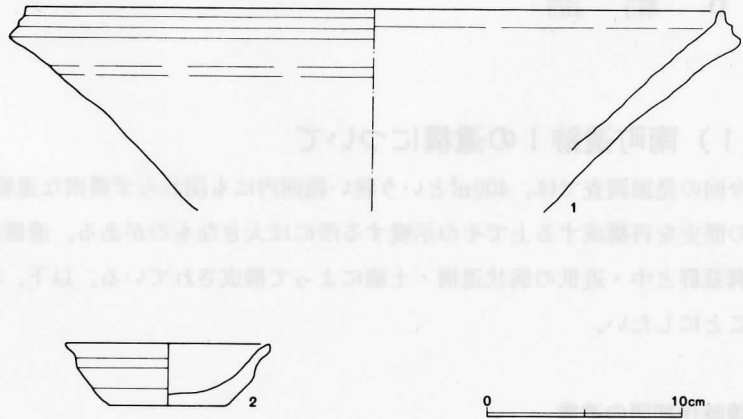
第20図 2号ピット、グリッド出土土器実測図

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	碗	口径 (9.6)	内彎して立上る体部で、口唇部に内傾する面を持つ。内外面とも、横方向のヘラ磨き後赤彩。	胎土 密。 A+H 焼成 良好 色調 10YR $\frac{7}{5}$ にぶい黄橙色	2号ピット 出土
2	台付甕	口径 (15.0)	頸部から緩やかに立上る口縁部。外面は、頸部以上ナデで、口唇部に刻目を施す。頸部以下、及び内面は、剝落の為不明。	胎土 密。 E 焼成 良好。 色調 10YR $\frac{7}{5}$ 明黄褐色	2号ピット 出土
3	台付甕	口径 (21.5)	頸部から、くの字状に屈曲する長い口縁部。剝落の為、調整法は不明。大形になると思われる	胎土 密。 A+E 焼成 良好。 色調 10YR $\frac{7}{5}$ 明黄褐色	カー2グリ ッド出土
4	台付甕	底径 10.7 現存高 8.6	脚台部。3と同一か。外面は、刷毛整形後、中位までをナデ消している。甕部内面は、ヘラナデ後、それをナデ消す。脚台部内面も同様である。	胎土 密。 F+H 焼成 良好。 色調 10YR $\frac{7}{5}$ 明黄褐色	同上

(5) 表採遺物

当遺跡では、表土中からも何点か遺物を採集している。以下に、図示可能なものを掲載しておく。

(第21図)



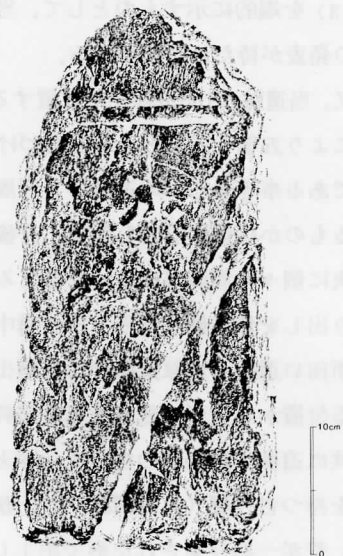
第21図 表採遺物実測図

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	鉢	口径 (36.4)	口縁部は、やや内傾する形で作出。シャープな造り。内外面ともロクロ痕明瞭。外面下半は、所々に指による凹凸を持つ。	胎土 密。F+H 焼成 良好。 色調 外面 2.5 YR% にぶい赤褐色 内面 10R% 赤橙色	表土除去作業中出土
2	かわらけ	口径 10.6 底径 6.1 器高 3.3	体部からやや内彎気味に立上る。ロクロ使用の水挽き成形。底面に不明瞭な作ら、回転糸切痕有	胎土 密。F+H 焼成 良好。 色調 7.5YR% 黄橙色	同上

第22図は、試掘時に近隣住民から調査区域内にあったと云う事で届けて頂いた板石塔婆である。現存高43.4cm、最大幅20.4cm、厚さ2.2 cmを測る。表面は、山形部の下に二条線が確認できる。種子は主尊の阿弥陀仏（キリーク）、右下方に随伴者の観音菩薩（サ）が確認でき、剥落している左下方の勢至菩薩（サク）と合せて、阿弥陀三尊を表現すると思われる。又、サの下方には蓮台も確認できる。材質は緑泥片岩である。

(福田 聖)

第22図 表採板石塔婆拓影図



6 結 語

(1) 南町遺跡 I の遺構について

今回の発掘調査では、400㎡という狭い範囲内にも関わらず濃密な遺物の分布が確認され、荒川左岸の歴史を再構成する上でその示唆する所には大きなものがある。遺構は、概ね古墳時代初頭の方形周溝墓群と中・近世の溝状遺構・土壌によって構成されている。以下、各時代毎に遺構について述べることにしたい。

古墳時代初頭の遺構

発掘調査で検出された古墳時代初頭の遺構は、方形周溝墓2基とピット3基である。

方形周溝墓2基は、何れも完掘できなかったものの、5で述べた様に主軸方向がほぼ同じであり、同一の単位集団により継続的に造営されたものと思われる。出土遺物が単一の様式として捉えられる為、その造営の時期差は殆ど無い様である。又、先後関係については、遺物からは明らかにし得ないものの、その規模の差異等から1号→2号の順序を考えて差し支えないと思われ、北西→南東の方向で造営されていたものと考えられる。この様な単一集団による群構成を意識した造営は、低湿地を挟んで南側に隣接する南原遺跡3・4号方形周溝墓や、北に500m程離れた新田口遺跡1・2号方形周溝墓で見られる事が鈴木敏弘氏(註1)や塩野博氏(註2)によって指摘されており、至近距離の異なる自然堤防上に占地する単位集団が、各々に方形周溝墓群を造営していたという複雑な地域性を知る事ができる。特に鍛冶谷・新田口遺跡では、東北新幹線建設に伴う発掘調査で、弥生時代後期後葉の所謂「弥生町式期」から古墳時代前期の五領Ⅱ式期に渡って90基余りの周溝墓群が複雑に造営されている事が明らかになっており、鈴木氏の云う「自然堤防上での生活の不安定性と社会構成上の未成熟」(註3)を端的に示すものとして、当遺跡の方形周溝墓群との関係を考える上で非常に興味深く、報告書の発表が待たれる所である。

又、当遺跡の100m程北に位置する上戸田本村遺跡(註4)の方形周溝墓群との関係については、報告者により五領Ⅱ式期として位置づけられている事、出土遺物が僅少である事、発掘調査が部分的なものである事等から、本遺跡の方形周溝墓群を造営した集団が継続的に造営したものか、異なる集団によるものかは俄に判断し難く、今後の問題を持ち越さざるを得ない。

次に個々の周溝墓について見てみたい。1号周溝墓は、主体部の他に南西コーナー部にテラス状の張り出しを伴う掘り込み、所謂溝中埋葬施設を持っている。同様の施設は、上戸田本村遺跡、鍛冶谷・新田口遺跡、南原遺跡等でも検出されている。当遺跡検出のものは、頭部に当たるであろうと思われる位置から大形の壺形土器が破碎された状態で出土しており、その出土層位に含まれる若干の焼土と共に追葬・追祭祀の様相を示すと思われる。又、南東コーナーでも、叩き目を意識した太目の刷毛目を持つ台付甕(第11図26)や、壺の穿孔された底部(第10図15~17)、粉々に破碎された壺(第9図2)等が一括投棄された形で出土しており、何らかの祭祀を示すものとして注意される。一方、遺物

集中区Bブロックからは、パレス文様を施すと思われる小形高坏や畿内系の甕底部が出土しており、南原遺跡のパレス文様を持つ長頸壺、鍛冶谷・新田口遺跡のS字口縁の台付甕と合せて、荒川左岸流域の当地域と東海方面との関係を示すものとして注目される。特にパレス文様を持つ小形高坏については、千葉県市原市小田部古墳(註5)で古墳(墳丘墓?)に供献されていたとされる例もあり、それが方形周溝墓から出土した意義は大きい。今後類例の増加を待って論議されねばならないであろう。

2号周溝墓については、その規模が1号周溝墓と比較して劣るものの、赤彩された太目の刷毛目を持つ台付甕(第15図7)も出土しており、出土遺物の面からも1号周溝墓と同一の系列に属する事は疑い得ないものと思われる。

以上の様な周溝墓各々の様相からも、当遺跡の方形周溝墓群が単位集団内でも有力な世帯によって、継続的に群構成を意識して造営された事が考えられよう。

3基のピットについては、今回の調査では個々の間に規則性を見出すことはできなかった。

中・近世の遺構

中・近世の遺構は、溝状遺構8条と土壙3基により構成される。その殆んどが無遺物に近い状態の為、時期の決定は行い難い。ここでは、それ等の中で特に注意される1・7号溝、3号土壙についてのみ見ておきたい。

1号溝は、調査区をほぼ東西に貫く形で掘り込まれる大形のものである。2、4、5号溝がそれに流れ込む形態を示す為、用水として使用された可能性も大きい。今後、古絵図等との照会によりその性格づけを為さねばならないであろう。

7号溝・3号土壙からは、各々宝篋印塔の相輪部・板石塔婆片が出土しており、表採遺物の板石塔婆と合せて、本遺跡が中世に於いて墓域として使用された事を示している。特に本遺跡の北東200mには、永徳二年(1382)開基と云われる新義真言宗智山派の多福院(註6)があり、その関係が注目される。

何れにしても、1号溝、3号土壙・7号溝が提起する問題には大きなものがあり、後日再考の必要があろう。

註1 鈴木敏弘他 「新倉午王山遺跡」 和光市午王山遺跡調査会 1981

註2 「戸田市史 通史編上」 戸田市 1986

註3 註1に同じ

註4 「戸田市史 資料編I」 戸田市 1981

尚、本村遺跡の報告書は刊行されていない。

註5 杉山晋作・安藤鴻基他 「千葉県市原市小田部古墳の調査」 古墳時代研究I 古墳時代研究会 1972

註6 註2に同じ。又、多福院の墓域については蕨城との関係もあり、ここでは速断し得ない。尚この問題については、戸田市立郷土博物館の大竹仁氏から御教示を頂いた。

参考文献

- 剣持和夫 「埼玉県の方形周溝墓」 第5回三県シンポジウム資料 北武蔵古代文化研究会・群馬県考古学談話会
・千曲川水系古代文化研究所 1984
- 塩野博・伊藤和彦 「鍛冶谷・新田口遺跡」 戸田市文化財調査報告Ⅱ 戸田市教育委員会 1968
- 同 上 「南原遺跡第1次発掘調査概要」 戸田市文化財調査報告Ⅲ 戸田市教育委員会 1969
- 同 上 「南原遺跡第2・3次発掘調査概要」 戸田市文化財調査報告Ⅴ 戸田市教育委員会 1972
- 鈴木敏弘他 「榎堂遺跡発掘調査報告書」 和光市史編さん資料6 和光市史編さん室 1983
- 西口正純他 「戸田市鍛冶谷・新田口遺跡の調査」 第17回遺跡調査報告会発表要旨 1984
- 「三～四世紀の東国―揺れ動く謎の時代―」 特別展図録 八王子市郷土資料館 1983
- 諸墨知義他 「鎌倉公園遺跡」 大宮市遺跡調査会報告第9集 大宮市遺跡調査会 1984

(2) 南町遺跡Ⅰの土器について

当遺跡の出土土器は、主として2つの周溝墓からのものである。5で触れた通り、1号周溝墓のコーナーを除いてその出土状況に統一性は無く、層位的な面からの出土遺物の先後関係の検証は行い難い。又、出土点数も少なく破片が主体であり、その資料的制約には大きなものがある。

ここでは、上記の資料の制約を踏まえた上で、南町遺跡Ⅰの出土土器を分類し、その時期設定を行う事にしたい。

出土土器の分類

当遺跡の出土土器は、壺形土器・小形壺形土器・台付甕形土器・甕形土器・高环形土器・小形高环形土器・鉢形土器・堦形土器の8器種から成る。一般に当該期のセットに含まれると云われる、器台形土器・甕形土器の出土は認められなかった。以下、各器種について分類を行う事にする。

壺形土器

破片が主体である。口縁部の形状によってA・B類に2分し、頸部、胴部、底部を各々C・D・E類とした。

A類 複合口縁を呈するものである。その製作法により2分した。

A₁類 幅の広い粘土帯を、下段の一部に重ね合わせて口縁部を成形するものである。本遺跡においては、当類の全てが複合部に縄文を施文する。1号周溝墓-2・3・4がこれに当たる。

A₂類 口縁端部に粘土帯を貼付して複合部を成形する、折り返し口縁のものである。複合部は文様を持たない。1号周溝墓-5、2号周溝墓-1がこれに当たる。

B類 単純口縁のものである。1号周溝墓-6・7・8がこれに当たる。

C類 突帯を持つ頸部の破片である。1号周溝墓-11がこれに当たる。

D類 胴部のみのものである。残存度に応じて2分した。

D₁類 胴部全体の知れるもの。1号周溝墓-1・10がこれに当る。

D₂類 胴部下半のみのものである。1号周溝墓-9、2号周溝墓-2・3がこれに当る。

E類 底部のみのものである。穿孔の有無により2分した。

E₁類 平底で穿孔されないもの。1号周溝墓-12・13・14、2号周溝墓-4がこれに当る。

E₂類 平底で、焼成後穿孔されたものである。1号周溝墓-15・16・17がこれに当る。

小形壺形土器

口径10cm以下のものを小形壺とした。緩やかに内彎して立上がる口縁部片で、所謂瓢壺形を呈すると思われる。1号周溝墓-18・19、2号周溝墓-5がこれに当る。

台付甕形土器

口縁部の形態を中心に、A～E類までを設定した。

A類 口縁部に刻目を有するものである。1号周溝墓-20・21・22・23がこれに当る。

B類 複合口縁を呈するものである。1号周溝墓-24・25、2号周溝墓-10がこれに当る。

C類 単純口縁のものである。調整法により2分した。

C₁類 刷毛整形のみのものである。1号周溝墓-26、2号周溝墓-7がこれに当る。

C₂類 刷毛整形後、ナデ調整されるもの。1号周溝墓-28・29、2号周溝墓-8がこれに当る。

D類 接合部のみのものである。2号周溝墓-11がこれに当る。

E類 脚台部のみのものである。調整法により2分した。

E₁類 刷毛整形のみのものである。1号周溝墓-30がこれに当る。

E₂類 刷毛整形後、ナデ調整を加える大形のものである。1号周溝墓-31、2号周溝墓-12がこれに当る。

甕形土器

ドーナツ状の底部を呈するものである。1号周溝墓-32がこれに当る。

高环形土器

他器種同様、破片が主体である。坏部の形状によりA・B類に分類し、接合部・脚部をC類とした。

A類 内彎して立上がるものである。口唇部に内傾する面を持つ。1号周溝墓-33、2号周溝墓-13がこれに当る。

B類 直線的に開くものである。1号周溝墓-34・35がこれに当る。

C類 接合部、脚部のみのものである。1号周溝墓-36、2号周溝墓-14がこれに当る。

小形高环形土器

破片のみである。坏部・脚部を各々A・B類とした。

A類 坏部のみのものである。無文である。1号周溝墓-37・38がこれに当る。

B類 脚部のみのものである。小破片の為図化できなかったが、所謂パレス文様を持つと思われる。1号周溝墓出土品である。

鉢形土器

ここで鉢形土器としたものは、逆八字形に開くものではなく、頸部を有するものである。1号周溝

墓-39、2号周溝墓-6がこれに当る。

碗形土器

内彎する体部を持つものである。2号ピット-1がこれに当る。

各器種の様相と時期設定

壺形土器

A₁類は、幅の広い粘土帯を下段の一部に重ね合わせる事によって複合部を作り出すものである。内面は、緩やかに内彎する。一般に、宮ノ台式の受口状口縁に祖型が求められると云われ(註1)、弥生時代後期-久ヶ原式期から古墳時代の初頭まで見られるものである。本遺跡出土例は、何れも複合部外面に縄文を施文している。特に1号周溝墓-2(第9図)は、口唇部にLR、複合部・肩部にRL-LR・RL-LRの羽状縄文を施すもので、文様帯は区画されず、更に円形朱文が施されている。これ等の文様構成は、笹森紀巳子氏の論考によれば「前野町式」期に比定できるものである(註2)。又、図示不能な小破片で、棒状浮文を施した口縁部片と思われる破片が2点出土している。他遺跡の例等から、本類に属すものと考えられる。周辺地域では、鍛冶谷遺跡(註3)、前谷遺跡(註4)、中里前原遺跡(註5)、赤台遺跡(註6)、鎌倉公園遺跡(註7)、針ヶ谷南通遺跡(註8)、上台遺跡(註9)、赤塚水川神社北方遺跡(註10)、成増一丁目遺跡(註11)等に類例が見られる。

A₂類は、幅の狭い粘土帯を貼付する事によって複合部を形成する、折り返し口縁状のものである。鎌倉公園遺跡でB₂類とされたものがこれに当たる。本遺跡出土例は、文様が施されず後出的である。周辺地域では、鎌倉公園遺跡、薬師耕地前遺跡(註12)、鍛冶谷遺跡、南原遺跡(註13)、成増一丁目遺跡等に類例が見られる。

B類は、単純口縁のものである。器形的には、緩やかに括れる頸部と球形の胴部を呈すと思われる。周辺地域では、新田口遺跡(註14)、南原遺跡、鎌倉公園遺跡、成増一丁目遺跡等に類例が見られる。

C類は、突帯を有する頸部の破片である。東海西部地方にその系譜が求められる。赤台遺跡の報文中で山崎氏が指摘する様に、荒川流域左岸では東海西部系の土器の類例が増加しており、本例もその一例として捉える事ができる。周辺地域では、南原遺跡、新田口遺跡、南通遺跡、須黒神社遺跡(註15)等から検出されている。

D類は、胴部のみのものである。このうちD₁類とした1号周溝墓-1(第9図)は、肩部に網目状擦糸文を施すものであり、区画を持たず細目である事から弥生時代終末期以後のものとして捉えられる(註16)。周辺地域では、南原遺跡、鎌倉公園遺跡、上台遺跡、また報告書未刊であるが鍛冶谷・新田口遺跡(註17)等で類例が見られる。

E類は、底部のみの破片である。鎌倉公園遺跡でI₃類とされるものがこれに当たる。又、当類に属する穿孔された底部は、全て1号方形周溝墓南東コーナーからの出土であり、その出土状況とも合わせて遺構との関係が注意される。

小形壺形土器

緩やかに内彎する口縁部を持つもので、所謂瓢壺形を呈すと思われる。胎土は精選されており、外来系の器種である事が窺える。周辺地域では、鎌倉公園遺跡、赤台遺跡、鶴ヶ丘遺跡F区(註18)、

鍛冶谷・新田口遺跡等に類例が見られる。

台付甕形土器

A類は、口唇部に刻目を有するものである。概して、緩やかに頸部から口縁部に移行する。調整法・頸部の屈曲により細分も可能であるが、資料数が少ない為同一類系の中にまとめておいた。周辺遺跡では、鍛冶谷遺跡、新田口遺跡、南原遺跡、鎌倉公園遺跡、成増一丁目遺跡、赤羽台遺跡(註20)等で類例が見られる。

B類は、複合口縁を有するものである。胴部以下が確認できない為、平底の甕や広口壺に分類できる可能性を持つ。鍛冶谷遺跡、別所遺跡(註21)、中里前原遺跡、南通遺跡、尾山台遺跡(註22)等に類例が見られる。

C類は、単純口縁を呈するものである。C₁類は口縁外面の調整が刷毛のみのものである。本遺跡出土のものは口唇部が面取りされており、この口唇部に平坦面を持たせる手法は、所謂「前野町式」期に見られるという指摘もあり(註23)注意を要する。又、2号周溝墓-7(第11図)は、肩部以上を赤彩し、叩き目を意識した様な太目の刷毛目で調整され、共食儀礼を示すものと考えられる。又、太目の刷毛目を施す点では1号周溝墓-26も同様であり、本類が他の甕と違った意味を持つ事を示すものと思われる。口縁外面が刷毛目のみの台付甕は、新田口遺跡、鎌倉公園遺跡、須黒神社遺跡、赤台遺跡、南通遺跡、赤塚水川神社北方遺跡、成増一丁目遺跡、赤羽台遺跡等で類例が見られる。

C₂類は、刷毛整形後横ナデを加えるものである。刻目の消失→刷毛整形のみ→刷毛+横ナデの方向で新旧関係を考えた場合、最も新出の要素を持つものとして捉えられる。周辺地域では、南原遺跡、新田口遺跡、上戸田本村遺跡(註24)、須黒神社遺跡、赤台遺跡、南通遺跡、成増一丁目遺跡等で類例が見られる。平底の可能性もある。

D類は、接合部の破片である。外面にヘラ磨きが施されるが、この破片のみで本遺跡の土器群での位置づけは行い難い。

E類は、脚台部のみのものである。E₁類としたものは、外面に刷毛目を残す個体で僅かながら内彎する。該期の台付甕の脚台部に一般的に見られるものである。E₂類としたものは、刷毛整形の後にナデを加える比較的大形のものであり、E₁類よりも直線的である。周辺地域では、鍛冶谷・新田口遺跡、成増一丁目遺跡、赤台遺跡等に類例が見られる。

甕形土器

所謂ドーナツ状を呈する底部である。同様な形態を示す底部は、畿内第V様式期・庄内式期に盛行するもので、石野博信氏からは模倣品ではないかというコメントを頂いている。胎土・色調が本遺跡出土品の中ではかなり特異な為、第4紀地質研究所の井上巖氏にコメントを御願した。そのコメントは別に掲載したので参考にされたい。周辺地域では、鍛冶谷・新田口遺跡、馬込大原遺跡(註25)、平林寺遺跡(註26)で叩き甕が、同様の底部を持つものが西台遺跡(註27)から、搬入品と思われるものが亀山遺跡(註27)から出土している。

高坏形土器

A類は、内彎する坏部を持つものである。いずれも破片の為傾きを確定できないが、深めの坏部で坏部下半に段を持たないものと想定できる。この形態の高坏は、東海地方西部が出自のもので比田井

克仁分類(註28)のC類に当ると思われる。周辺地域では、赤台遺跡、鎌倉公園遺跡、大宮公園内遺跡(註29)、楽上遺跡(註30)、西原遺跡(註31)、ささら遺跡(註32)、須黒神社遺跡、新田口遺跡等で類例が見られる。

B類は、直線的な坏部を有するものである。本来ならば脚台部の形態により分類されるところなのだろうが、資料数が少なく果し得ない。ここではとりあえず、坏部下半に稜を有し、脚台部が直線的、或いはやや外反して開く該期の一般的な高坏としておきたい。その場合の類例としては、新田口遺跡、南原遺跡、吉野原遺跡(註33)、大宮公園内遺跡、尾山台遺跡、南通遺跡、成増一丁目遺跡の出土例が挙げられる。

C類は、接合部・脚部のみの破片である。2号周溝墓-14は脚部片だが、大きく外反するものと考えられ、3孔を有し新出的である。類例としては、南原遺跡、新田口遺跡、大宮公園内遺跡、吉野原遺跡、ささら遺跡、成増一丁目遺跡等の出土例を挙げることができる。

小形高坏

A類は、内彎する坏部片である。文様は施されない。赤台遺跡でA₁類とされたものがこれに当る。

B類は、裾部の小破片で、外面に平行沈線が施されるものである。所謂パレス文様が施されていると考えられる。周辺地域では、赤台遺跡、鎌倉公園遺跡、袋低地遺跡(註34)等で類例が見られる。所謂小形高坏について比田井氏は、小形丸底皿の伝播以前に盛行する時期があったという、弥生時代終末～古墳時代初頭の様相を理解する上で非常に重要な指摘を行っている(註35)。又、諸墨氏が鎌倉公園の報文中で述べている様に、小形器台とパレス文様を施文する小形高坏は共伴しない事がほぼ確実となってきた。当遺跡も、その例外ではないと思われる。弥生時代終末と古墳時代初頭の様相を考える上で、更なる類例の増加を待って論議が必要であろう。

鉢形土器

ここで云う鉢形土器とは、底部から逆八字形に開くものではなく、頸部を有するものである。他遺跡の例ではヘラ磨き・赤彩されたものが多いが、当遺跡のものは刷毛目をそのまま残すもので若干様相を異にする。周辺地域では、鍛冶谷・新田口遺跡、上台遺跡、別所遺跡、赤塚氷川神社北方遺跡等に類例が見られる。

碗形土器

内彎する体部を持つもので、口唇部は内傾する平坦面を持つ。他遺跡では高坏として検出されたものもあり、当遺跡のものもその可能性を持つ。周辺地域では、赤台遺跡、南通遺跡に類例が見られる。

以上、分類・各説を試みた土器群は、従来研究者によって「前野町式」「五領Ⅰ式」の何方にも扱われてきた一群である。「前野町式」の様式設定に疑義が提出されてから久しく、最近ではその地域性も含めた論考(註36)も見られるが、まだ統一された有効な解釈は生まれていない。その為、「前野町式」と「五領式」の接点に関しても、研究者毎に理解が異なり混乱状態にあるのが現状である。この様な状況の下で、当遺跡の土器群を位置づけるのは多分に躊躇される所であるが、ここではその新出的な要素を積極的に評価して「五領Ⅰ式」の最古段階としておきたい(註37)。後日、当遺跡の報文とほぼ時を同じくして発表される東北新幹線関係の鍛冶谷・新田口遺跡の類例と合わせて、再考を試みるつもりである。

末筆ではあるが、本稿をまとめるに当たり、格別の御指導・御協力を頂いた立石盛詞氏、西口正純氏をはじめ、コメントを寄せて頂いた石野博信氏、胎土分析を引受けて下さった井上巖氏、遺物のトレースをして頂いた山崎えり子氏、有益な御助言を頂いた酒井和子氏、金井由美子氏に、心より謝意を表したい。

(福田 聖)

- 註1 福田敏一 「南関東弥生土器にみられる二系統」 法政考古学第6集 法政考古学会 1981
比田井克仁 「古墳出現前段階の様相について—南関東地方を巨視的に—」 考古学基礎論3 考古学談話会 1981
- 註2 笹森紀己子 「久ヶ原式から弥生町式へ—壺形土器の文様を中心に—」 土曜考古第9号 1984
- 註3 塩野博・伊藤和彦 「鍛冶谷・新田口遺跡」 戸田市文化財調査報告Ⅱ 戸田市教育委員会 1968
- 註4 塩野博・伊藤和彦 「前谷遺跡発掘調査概要」 戸田市文化財調査報告Ⅻ 戸田市教育委員会 1978
- 註5 秦野昌明・仲野紀己子 「中里前原遺跡—第1次発掘調査報告書」 中里前原遺跡調査会 1980
秦野昌明・福田敏一 「中里前原遺跡—第2次発掘調査B地点—」 与野市文化財報告書第5集 与野市教育委員会 1981
- 註6 山崎武他 「赤台遺跡」 鴻巣市遺跡調査会報告書第5集 鴻巣市遺跡調査会 1985
- 註7 諸墨知義・山形洋一他 「鎌倉公園遺跡」 大宮市遺跡調査会報告第9集 大宮市遺跡調査会 1984
- 註8 小出輝雄 「針ヶ谷遺跡群—南通遺跡第3地点の調査—」 富士見市遺跡調査会報告第21集 富士見遺跡調査会 1983
- 註9 柿沼幹夫・小川順一郎他 「上台遺跡群」 川口市文化財調査報告書第21集 川口市教育委員会 1985
尚、この報文中で柿沼氏は、註2の笹森氏の論考について批判的な見解を述べている。
- 註10 滝沢浩他 「赤塚氷川神社北方遺跡」 文化財シリーズ第29集 板橋区教育委員会 1979
- 註11 鈴木敏弘他 「成増一丁目遺跡発掘調査報告」 成増一丁目遺跡調査会・板橋区教育委員会 1981
- 註12 赤石光資 「薬師耕地前遺跡」 上尾市文化財調査報告第4集 上尾市教育委員会 1978
- 註13 塩野博・伊藤和彦他 「南原遺跡第2・3次発掘調査概要」 戸田市文化財調査報告Ⅴ 戸田市教育委員会 1972
- 註14 註3に同じ
- 註15 浜野美代子・鈴木仁子 「須黒神社遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第56集
(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 註16 註2に同じ
- 註17 西口正純氏、御教示による。
- 註18 小久保徹他 「鶴ヶ丘」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第8集 埼玉県教育委員会 1976
- 註19 註16に同じ
- 註20 東北新幹線赤羽地区遺跡調査会 「赤羽台・袋低地・舟渡(概報)」 1986
- 註21 浦和市遺跡調査会 「別所遺跡発掘調査報告書」 浦和市遺跡調査会報告書第12集 1980

- 註22 「新編埼玉県史 資料編2」 埼玉県 1982
- 註23 大村直・石川日出志他 「神谷原Ⅲ」 八王子市栢田遺跡調査会 1982
- 註24 「戸田市史 資料編Ⅰ」 戸田市 1981
- 註25 藤原高志・大塚孝司 「ささら・帆立・馬込新屋敷・馬込大原」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第24集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1983
- 註26 柳田敏司他 「加倉・西原・馬込・平林寺」 埼玉県遺跡調査会報告書第14集 埼玉県遺跡調査会 1972
- 註27 「三〜四世紀の東国一揺れ動く謎の時代」 特別展図録 八王子市郷土資料館 1983
- 註28 比田井克仁 「古墳時代前期高坏考」 古代第74号 早稲田大学考古学会 1983
- 註29 柳田敏司・早川智明他 「大宮公園内遺跡発掘調査報告」 埼玉県立博物館紀要-2 1976
- 註30 吉川国男他 「砂ヶ谷戸Ⅰ・Ⅱ遺跡 築上遺跡」 桶川市文化財調査報告書第9集 桶川市教育委員会 1970
- 註31 註26に同じ
- 註32 註25に同じ
- 註33 「大宮市史 第1巻考古編」 大宮市 1968
- 註34 註20に同じ
- 註35 比田井克仁 「古墳発生時における小形高坏について(試論)」 金鈴22 早稲田大学考古学研究会 1980
- 註36 大村直・菊池健一 「久ヶ原式と弥生町式-南関東地方における弥生時代後期の諸様相(予報)-」 史館第16号 1984
- 註37 新出的要素を持つ土器群の器種は、湯川・加納氏によれば、有段口縁壺・埴・小形丸底土器・小形高坏・小形器台・大形器台とされている。又、同氏は小形丸底壺・二重口縁壺の出現は他器種に較べて遅れるとしており、前述した比田井氏の論考も合わせて、当遺跡が小形丸底埴が出現する以前の段階に当る事は確実である。しかし、この小画期が弥生時代終末に当たるのか、古墳時代初頭に当たるのかは、その両時代の根本的な理解に関わってくるもので、ここで速断は行い難い。それ等の問題も含めて、別稿の要を痛感している。尚、湯川・加納氏の論文名は、参考文献欄に記した。

参考文献

- 青木美代子・鈴木仁子他 「三番耕地・十八番耕地・十二番耕地・神山」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第43集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1985
- 赤石光資 「秩父山遺跡」 上尾市文化財調査報告第5集 上尾市教育委員会 1978
- 今井宏・井上尚明・立石盛詞・酒井和子 「屋田・寺ノ台」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第32集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1984
- 佐々木克典・大村直他 「神谷原Ⅰ」 八王子市栢田遺跡調査会 1981
- 金井塚良一他 「シンポジウム五領式土器について」 台地研究No.19 台地研究会 1971
- 同 上 「五領遺跡B区の発掘調査」 台地研究No.13 台地研究会 1963
- 佐々木俊俊・小出輝雄他 「針ヶ谷遺跡群」 富士見市遺跡調査会報告第23集 富士見市遺跡調査会 1984
- 三県シンポジウム 「古墳出現期の地域性」資料 北武蔵古代文化研究会・群馬県考古学談話会・千曲川水系古代

文化研究所 1985

塩野博・増田逸朗 「西台遺跡の発掘調査」 桶川市文化財調査報告Ⅳ 桶川市教育委員会 1970

庄野靖寿・笹森紀己子他 「尾ヶ崎遺跡」 庄和町・尾ヶ崎遺跡調査会 1984

関根孝夫 「諏訪原遺跡」 松戸市文化財調査報告第5集 松戸市教育委員会 1974

鈴木敏弘他 「新倉午王山遺跡」 和光市午王山遺跡調査会 1981

高橋俊男他 「袋・台遺跡」 吹上町教育委員会 1982

玉田浩一他 「小室天神前遺跡」 伊奈町天神前遺跡調査会 1981

細田勝・富田和夫・利根川章彦 「向田・権現塚・村後」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第38集

(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1984

宮 昌之 「札之述・小井戸」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第55集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

1986

村田健二・井上尚明・剣持和夫・富田和夫・西口正純 「埼玉の弥生後期関連遺跡と土器」第3回三県シンポジウ

ム資料 北武蔵古代文化研究会・群馬県考古学談話会・千曲川水系古代文化研究所 1982

村田健二 「古凍・根岸裏」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第37集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

1984

湯川悦夫・加納俊介 「古式土師器の研究」 小田原考古学研究会会報第7号 小田原考古学研究会 1976

横川好富 「埼玉県の古式土師器」 埼玉県史研究第10号 埼玉県史編さん室 1983

(3) 南町遺跡Ⅰの性格について

以上のように、南町遺跡Ⅰは、古墳時代前期初頭の方形周溝墓、室町時代の墳墓、そして中・近世の溝跡が検出された。ここでは、前章と重複するところもあるが、南町遺跡Ⅰで検出された遺構・遺物の特徴から遺跡の性格について若干まとめてみることにする。

方形周溝墓は2基検出され、これが切り合うことなく整然と規則性をもって配置されていた。1号方形周溝墓は、規模も大形の範疇に入る周溝墓であり、その南東に位置する周溝墓は1号方形周溝墓に比較すると規模の小さいものであるが、おそらく、単一集団の築造によるものである。しかも、周溝内の覆土から検出された土師器類は、ともに五領Ⅰ式のもので、ほとんど時間的な差はないものである。したがって、この方形周溝墓群は、ほぼ同一時期に築かれたものと考えてよい。そして、規模の差異などから1号方形周溝墓がまず築かれ、次にその側に2号方形周溝墓が築かれたものと考えられる。このように、方形周溝墓が継続して規則性をもって配置される例は、鍛冶谷・新田口遺跡の新田口1号・2号方形周溝墓(註1)や、南原遺跡の3号・4号方形周溝墓(註2)の間でみられたが、戸田市内の遺跡における方形周溝墓隆盛期においては、円形化した周溝墓が互いに切り合い、規則性もなく、めっちゃくちゃな築造方法をとっているのとは、きわめて対照的である。なお、南町遺跡Ⅰの方形周溝墓は、鍛冶谷・新田口遺跡の弥生町式土器を出土した方形周溝墓のように、戸田市における出現期の周溝墓が、溝が深く整然とした形態をとっているのと同じように、初期に近い、五領Ⅰ期初頭の方方形周溝墓であるため、まだ形態もくずれず、しかも規則正しい配置が行われたのである。

また、1号方形周溝墓の各コーナー部分には、破碎された壺形土器や甕形土器が覆土中から出土し

ている。これは、「葬送儀礼の際、飲食物を入れたり、盛ったり、煮炊きするために使用され、葬儀が終了した後汚れたものとして廃棄された土器」(註3)であったとみてよい。

これらの土師器の中には、小片ながら東海地方で盛行したパレス文様を施した小形高環形土器の脚部や畿内の影響を受けた甕形土器の底部が検出されている。東海地方の影響を受けた土器は、南原遺跡3号住居跡のパレス文様を持った長頸壺形土器や、鍛冶谷・新田口遺跡のS字口縁台付甕形土器が、戸田市内で知られている。これらの土器は、それぞれ五領Ⅱ式土器に伴って検出されているが、南町遺跡Ⅰでは、これよりも早く五領Ⅰ式の最古段階の土師器に伴っている。このことは、この地が東京湾に近く、旧入間川(現・荒川)を利用した西日本の文化伝播の重要拠点であったことが知れるとともに、荒川下流域東岸において、きわめて有力な族長の存在が明らかにされたのである。なお、集落跡の所在については不明であるが、本遺跡の北側の高地(本村遺跡周辺)が有力である。

中世墳墓については不明のところが多いが、土壌の中に板石塔婆の基部の一部が残存していたことや、7号溝から宝篋印塔の相輪が検出されたり、かわらけが表土中から検出されていることなど、この地に中世墳墓のあったことは明確である。なお、本遺跡の北東200 mに多福院(永徳2年開基)が所在しているが、この寺域であったことも考えられる。また、土豪の家敷地の一角にあたり、その家敷墓とも考えられる。今後、本遺跡の南隅に検出された1号溝の性格と関連して精査しなければならない。

その1号溝は、微高地の南端を直進しており、これより南は、低い湿地である。したがって、この溝は、集落地と低湿地を区切る溝。または、農耕地用の用水路とも考えられる。今後、この周辺の絵図などが発見されれば、その性格も解明されるであろう。(塩野 博)

註1 塩野 博・伊藤和彦 「鍛冶谷・新田口遺跡」 戸田市文化財調査報告Ⅱ 戸田市教育委員会 1968

註2 塩野 博・伊藤和彦他 「南原遺跡第2・3次発掘調査概要」 戸田市文化財調査報告Ⅴ 戸田市教育委員会 1972

註3 田代克己 「いわゆる方形周溝墓の供献土器について」 鳥越憲三郎博士古稀記念会編『村構造と他界観』 雄山閣 1986

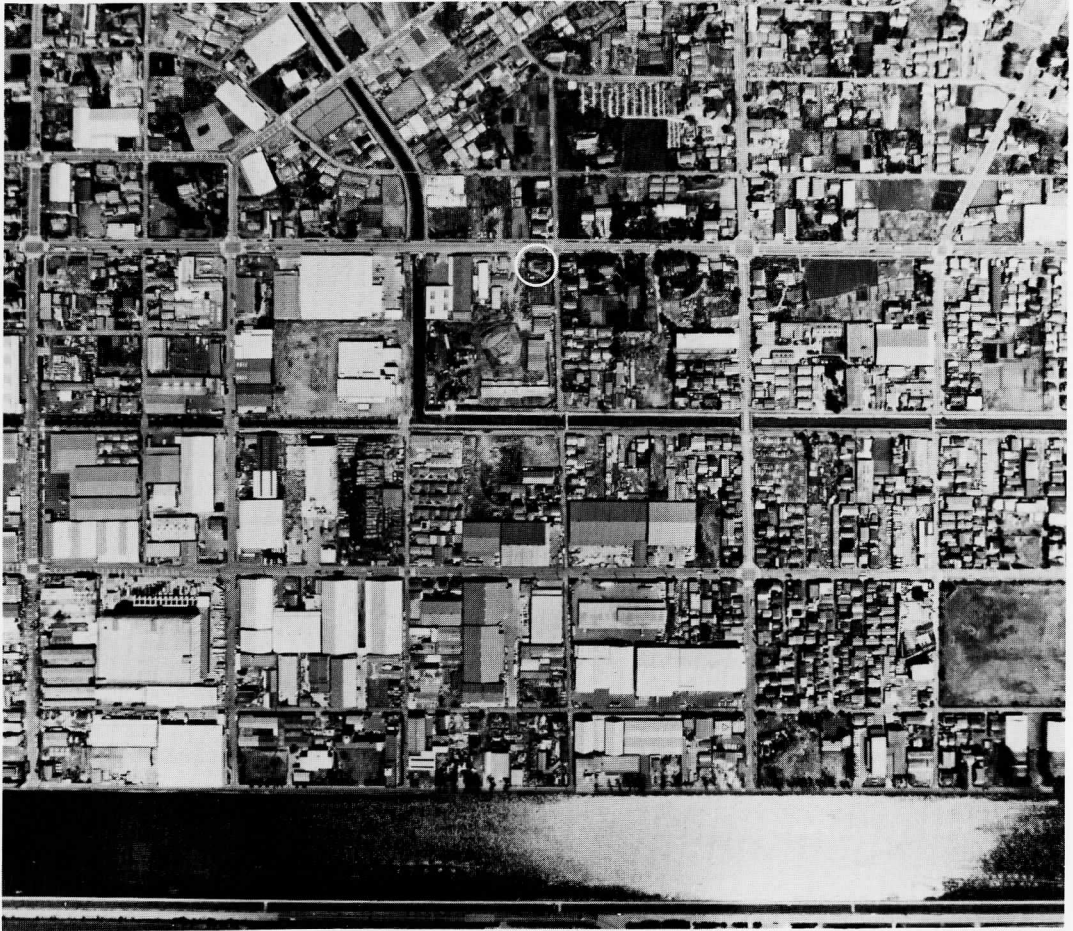
付 記：～井上氏よりのコメント～

第11図-32の甕形土器底部について、胎土分析を御願ひした第四紀地質研究所の井上巖氏から、以下のコメントを頂いた。結語等と合せて参照されたい。

「土器胎土は細粒の石英、斜長石を混入する粒径のそろった均質な碎屑性粘土で構成される。

ガラスは中粒で、比較的よくガラスが生成し、材質の良さを裏付けている。焼成ランクはⅢ(Cr-Glass)で、温度的にはやや高い状態にあったと考えられる。

石英-斜長石比(62:8)では畿内系布留式(Ⅳ)の胎土良質のものと類似した値を示すが、カリ長石が入っておらず、還元炎で焼成され、粘土鉱物組成も異なっており、畿内系とはいいがたい。」

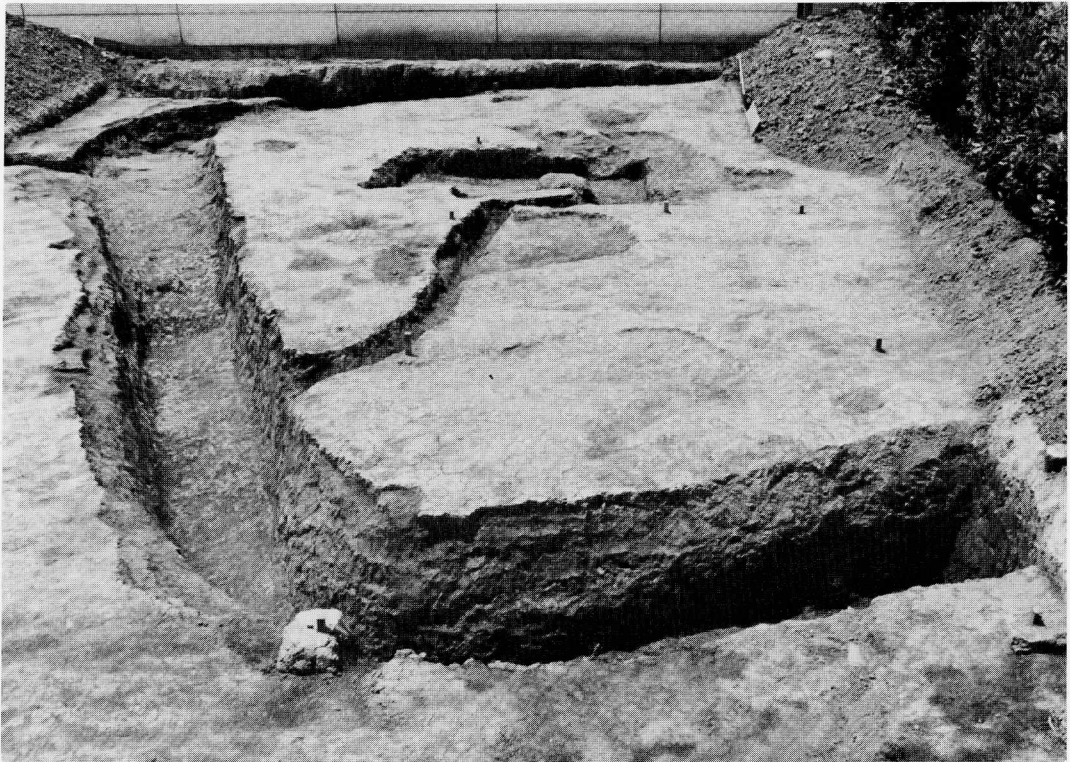


(1) 南町遺跡I の位置



(2) 第1号方形周溝墓 (南から)

図版 2



(1) 第1号方形周溝墓 (東から)



(2) 第1号方形周溝墓 (西から)

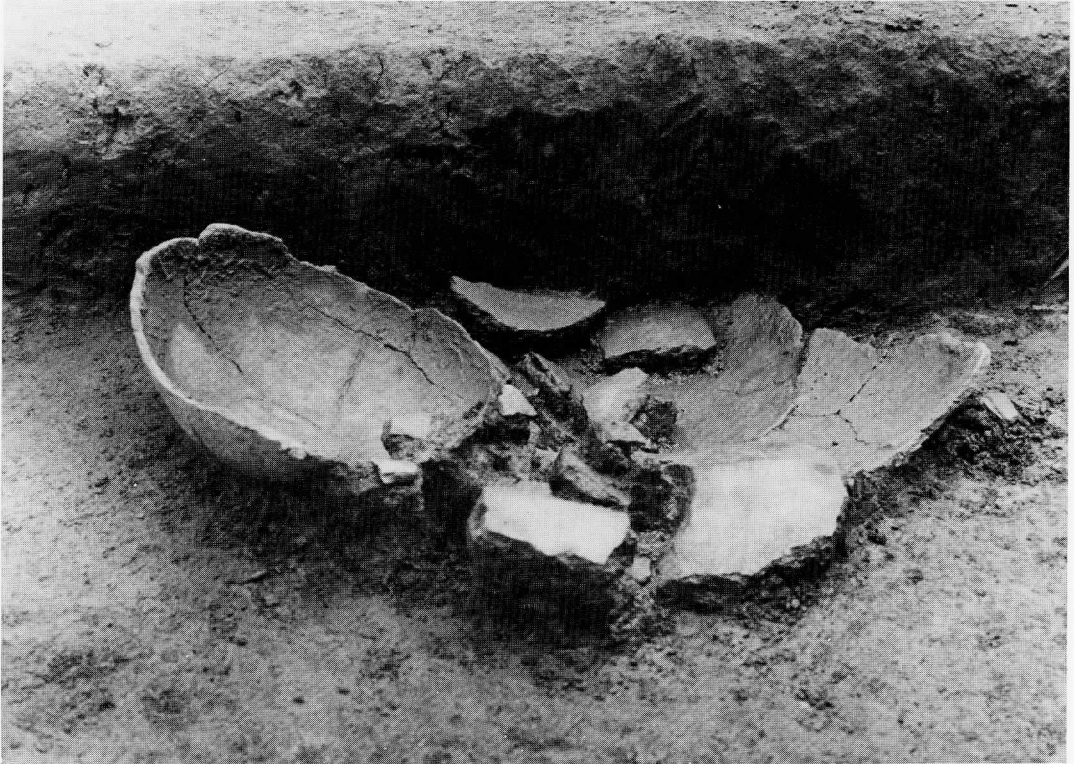


(1) 第1号方形周溝墓南溝 (東から)



(2) 第1号方形周溝墓南溝 (西から)

図版 4



(1) 第1号方形周溝墓土器出土状態 (その1)



(2) 第1号方形周溝墓土器出土状態 (その2)



(1) 第1号方形周溝墓土器出土状態 (その3)



(2) 第1号方形周溝墓土器出土状態 (その4)

図版 6



(1) 第2号方形周溝墓 (南から)



(2) 第2号方形周溝墓土器出土状態

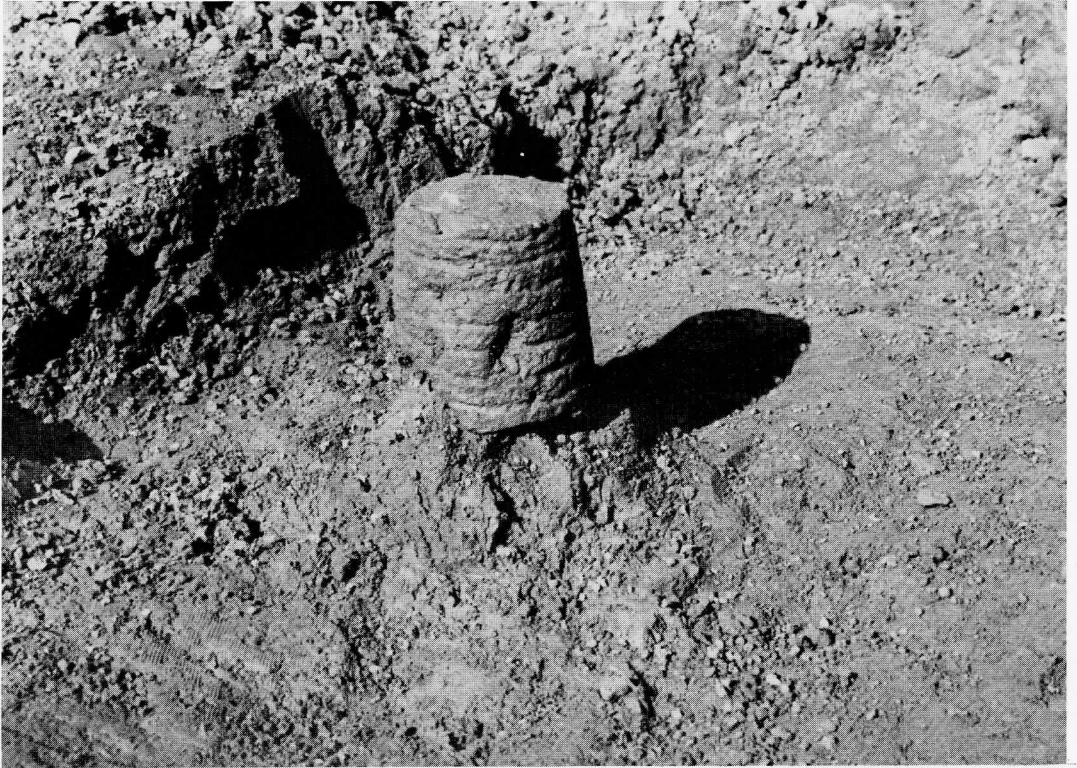


(1) 1・2・3・4・5溝 (東から)



(2) 1・2・3・4・5溝 (西から)

図版 8



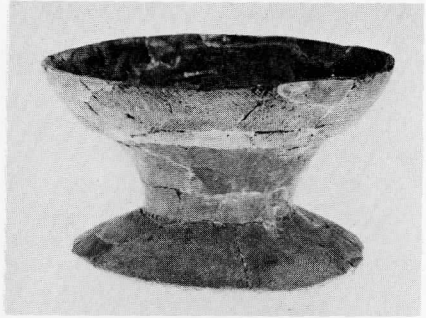
(1) 7 溝宝篋印塔相輪出土状態



(2) 近世陶器（鉢）出土状態



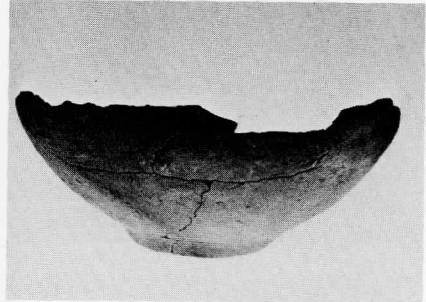
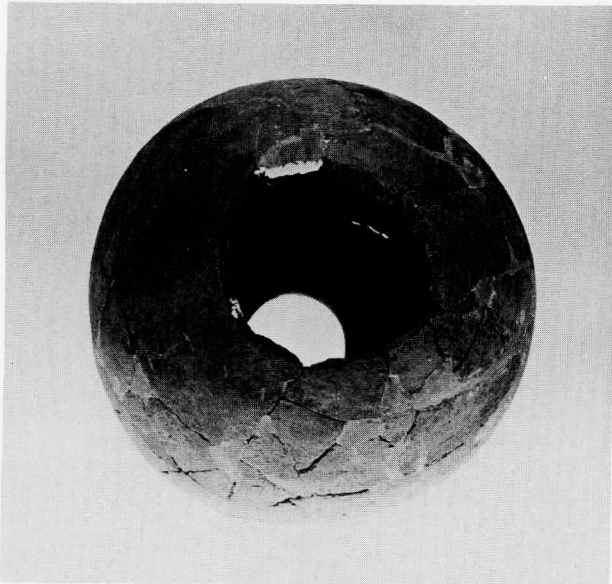
(1) 第1号方形周沟墓出土壶形土器



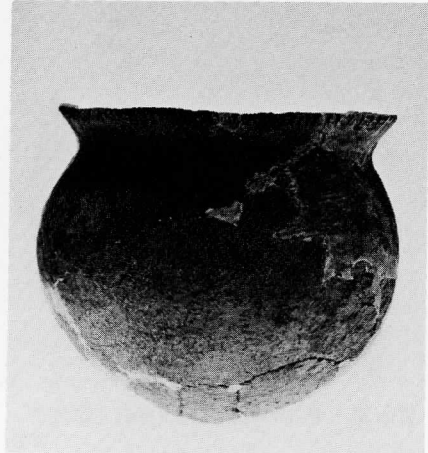
(2) 第1号方形周沟墓出土壶形土器



(3) 第1号方形周沟墓出土壶形土器



(4) 第1号方形周沟墓出土壶形土器

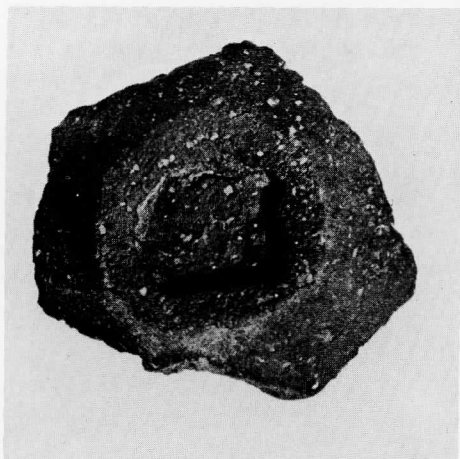


(5) 第1号方形周沟墓出土甗形土器

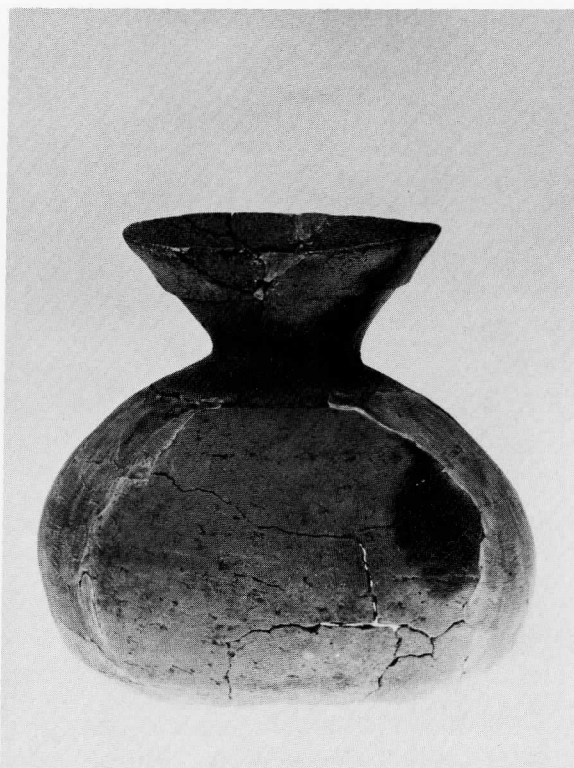
図版 10



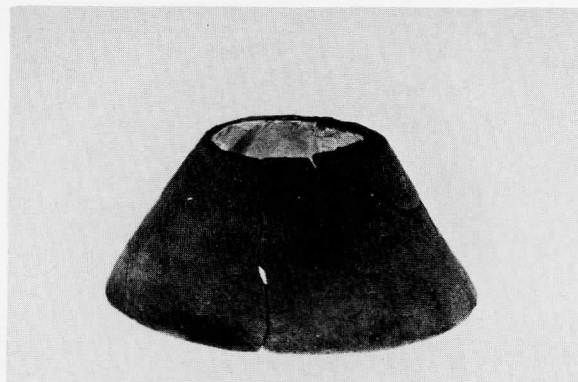
(1) 第1号方形周溝墓出土台付甕形土器台部



(2) 第1号方形周溝墓出土甕形土器底部



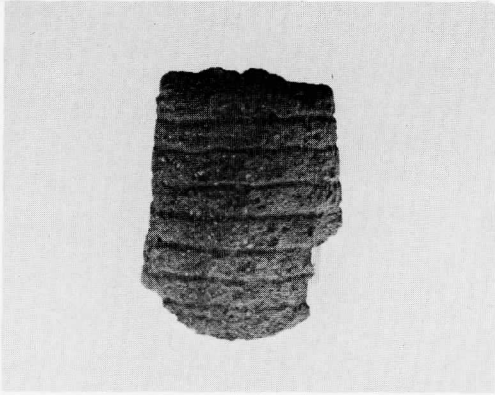
(3) 第2号方形周溝墓出土壺形土器



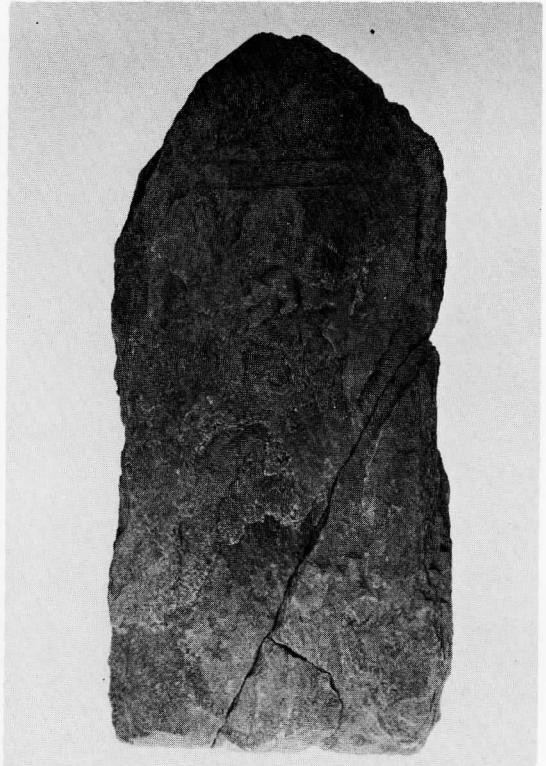
(4) 第2号方形周溝墓出土台付甕形土器台部



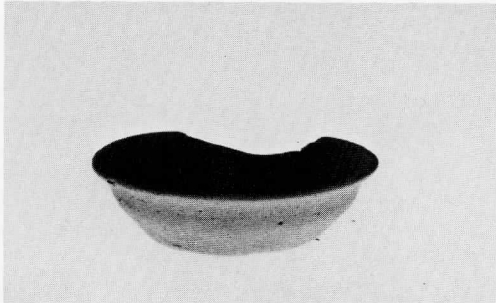
(5) カー2グリッド出土台付甕形土器台部



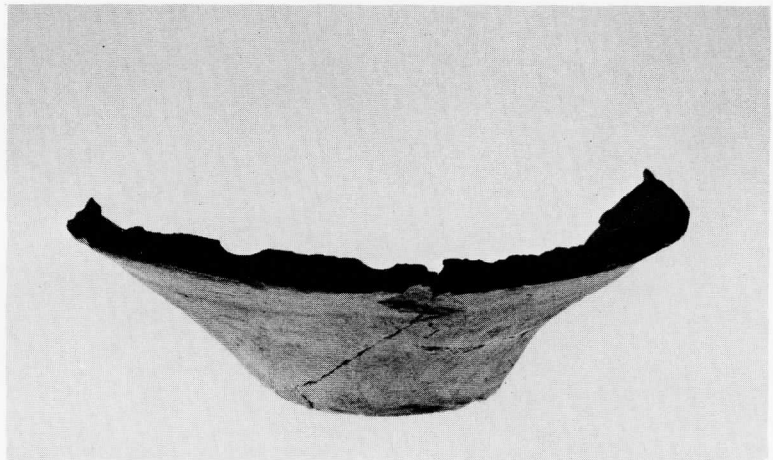
(1) 7 溝出土宝篋印塔相輪



(3) 表採した板石塔婆



(2) 表土出土かわらけ(皿)



(4) 表土出土近世陶器(鉢)

南 町 遺 跡 I

埼玉県戸田市遺跡調査会報告書 第1集

発行日 昭和62年3月31日

発 行 戸 田 市 遺 跡 調 査 会
戸田市上戸田1-18-1
戸田市教育委員会内

印 刷 鏝 カ ミ ヤ 印 刷
浦和市道場3-14-4